

京都府埋蔵文化財情報

第 27 号

平安京の条坊復原	辻 純一	1
高山古墳群(7・8・11・12号墳)の発掘調査	増田 孝彦	8
栗ヶ丘横穴群の発掘調査	引原 茂治	17
上人ヶ平遺跡の発掘調査—弥生・古墳時代の概観—	小池 寛	23
—昭和62年度発掘調査略報—		33
13. 新ヶ尾東古墳群	18. 小 貝 遺 跡	
14. 普甲古墳群・稻荷古墳群	19. 蒲 生 遺 跡	
15. 泉 源 寺 遺 跡	20. 長岡京跡右京第281次	
16. シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群	21. 八ヶ坪遺跡	
17. 小西町田遺跡		
資料紹介 熊野郡久美浜町下山古墳出土の須恵器	荒川 史	50
志高遺跡出土の轟式系統の土器について	三好 博喜	52
府下遺跡紹介 39. 乙訓寺遺跡		54
長岡京跡調査だより		57
センターの動向		63
受贈図書一覧		65

1988年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版第1 上人ヶ平遺跡



(1) 3番地全景(南から):先端が弥生時代住居跡



(2) 上人ヶ平5号墳周濠・方形墳(S D2109, S X2111)検出状況(北から)



(1) 上人ヶ平5号墳造り出し部埴輪列検出状況（北東から）



(2) 上人ヶ平5号墳造り出し部鵝形埴輪(頭部)出土状況（西から）



1

(1) 縄文系統の土器



2

(2) 条痕文土器

平安京の条坊復原

辻 純 一

1. はじめに

平安京の条坊研究は、古くから京図や文献を中心にして行われてきた。その中で注目すべきものに明治28年に刊行された『平安通志』の平安京実測図及び杉山信三による「平安京の造宮尺について」^(注1)がある。前者は近代測量術を用いた実測図に『延喜式』の京程を乗せようとしたもので、従来の方法とはまったく質の違うものであった。これは東寺の伽藍と堀川の方位及び現尺に対して0.999となる値を、造宮尺とすることにより成り立っており、東寺と堀川が動いていないという前提にもとづいている。後者は卓上の計算だけではなく、^(注2)実地で確認するべく昭和37年に発掘調査で確認された西寺の食堂院南門跡を基点として、西寺の伽藍中心線を設定し、それと東寺の伽藍中心線との間の距離をスティールテープにより測定し『延喜式』上の距離(3,000尺)で除した値(造宮尺)を導くとともに、伽藍中心線の方位を計測し、^(注4)東寺、西寺の2定点と計測値を用いて京都市計画局発行の3,000分の1の地図上に『延喜式』の京程を展開していった。この方法は実際に発掘調査で確認された定点を使用して復原を試みたことにおいて我々に重要な示唆を与えたものであった。その後、条坊復原に関しては杉山の作成した復原図が比較的発掘調査の成果と合致したために、目新しい成果は現れてこず、局部の議論に集中した。

2. 調査の進展と記録法の改善

昭和40年代後半から都市再開発が京都市全域に展開され、発掘調査件数が急激に上昇を始めた。これにつれ遺構・遺物ともに膨大な量の資料が蓄積しはじめた。このように平安京を復原研究するうえでの貴重な資料は増加したが、調査団体が複数でかつ個別的なため各資料が有機的な結合を示さない問題が生じてきた。これらの弊害を解消するべく昭和51年末に(財)京都市埋蔵文化財研究所が設立され、京都市域における埋蔵文化財の調査研究の主体となった。また、京都市は田中琢・田辺昭三両氏の提言をうけ、昭和52・53年度に京都市全域に遺跡発掘基準点(一級基準点)35点を設置し、以後基準点より正確な測量を行うことにより同一座標系(第Ⅵ座標系)のもとで調査記録が作成され、遺構相互の有機的な検討分析が可能となった。このような整備が進むにつれ、注目されだしたのが条坊遺構であ

り、その分析作業が地図を離れ数値により開始され問題点が指摘されだした。

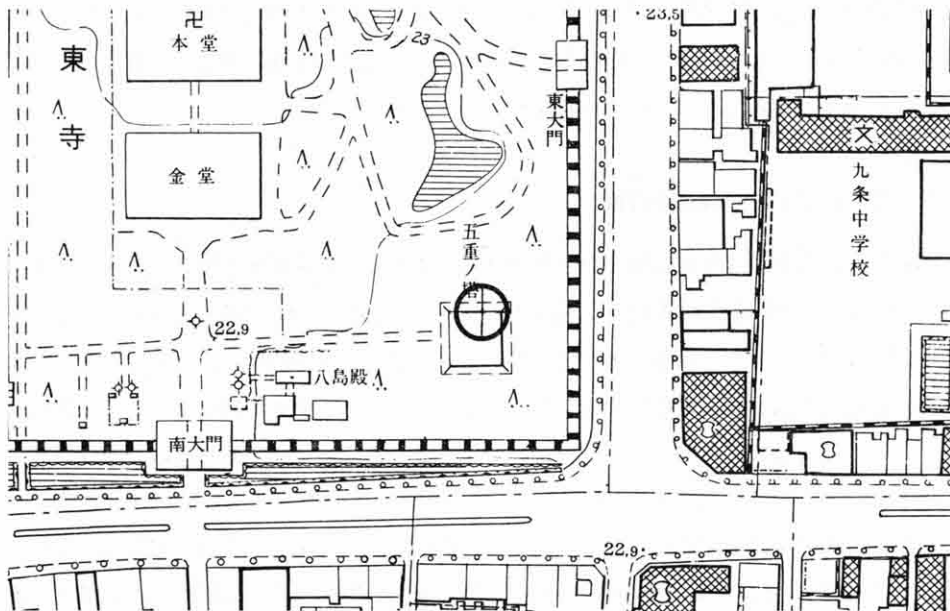
3. 地図の問題点

我々は、調査の補助用に1/2,500~1/10,000程度の地図を利用する。条坊復原図等も地図上に展開し、調査地の概略を知る手がかりに使用したりする。この程度の使用には十分であるが、より正確な位置情報となると心許ない。地図の精度は、公共測量作業規程により

1/1,000以下の地図については、図上±0.7mm(標準偏差)の誤差が許されている。つまり、1/2,500図で、1.75m程度の誤差をもっていることになる。これは現在のレベルの話であり京都市計画局発行のものはその作成時期が、20数年前にさかのぼり、当時の図化機の精度等を考えれば図上の誤

等角点 () 東寺		石		海	
全図係数		全図係数		全図係数	
B = 34' 38' 35" 965	縮尺係数	X = -113 887 87	縮尺係数	縮尺係数	縮尺係数
L = 135' 15' 5" 391	= 0.999 996	Y = -22 681 75	縮尺係数	縮尺係数	縮尺係数
		H =	縮尺係数	縮尺係数	縮尺係数
		柱石法	縮尺係数	縮尺係数	縮尺係数
視準点の名称		平均方向角	観測秒	距離の対数	備考
真北方向角		+ 0' 6' 33"		41	交会点
1	(42)	23' 6' 9"	片	2.974 412	
2	九	97' 16' 6"	片	2.719 058	
3	(28)	183' 26' 15"	片	2.301 333	
4	(24)	283' 1' 13"	片	2.369 889	

第1図 東寺 成果表



第2図 東寺 座標位置図 (1/2,500)

差はさらに大きいものになっていることが考えられる。ちなみに、遺跡発掘調査基準点の東寺塔相輪の座標値を地図上におとせば第2図になり、相当な誤差を確認することができる。また、誤差は一定にでているのではなく各図面によってばらばらであることも確認している。このように正確な位置情報が得られないものに、現実の調査で発見した条坊遺構の座標値をおとしたところで無意味であり、杉山作成の条坊復原図との地図上での比較も不可能であることが知れた。

4. 平安京の条坊復原

条坊復原のためには造営尺なる物差しと平安京がしめしている基線＝方位および原点と条坊モデル(造営時の設計図)が必要である。『平安通史』はそれらを現尺の0.999尺、堀川の示す方位、東寺というもので作り上げ、杉山は現尺の0.987尺、真北より西に15～29分振れた方位、東寺・西寺という定点により成り立っている。条坊モデルは両者とも『延喜式』の京程である。実際に、これらと調査により発見した条坊遺構の位置を比較した場合、『平安通史』のものは、誤差が大きいのに対し、杉山のものは誤差が非常に小さいことから、後者の値がほぼ真値に近いものであることが経験的にわかっていた。しかしながら、調査における記録作業が座標値で表されることから、調査支援のためにはどうしても座標値による正確な条坊復原が必要になったことや、信頼性の高い条坊遺構のデータが増加したことにより、条坊復原作業を開始した。これは遺跡調査において検出した確実な32か所の条坊遺構データより、条坊モデルとの誤差が最も小さくなるような造営尺及び方位の値を導き出すため、最小二乗法により平均計算をおこない結果をもとめた。なお、初期値は杉山の値を、原点はデータのうちの1つを、条坊モデルには『延喜式』を使用した。

計算は以下の仮定にもとずき成り立っている。

1. 平安京は『延喜式』の京程どおりに造営されたものとする。
2. 平安京の造営にあたっては、同一の物差しを使用した。
3. 平安京の各条坊は東西・南北線のそれぞれが同一の方位をもって造営された。

この仮定により平安京の条坊は直角座標系であることがわかり、第Ⅵ座標系との関係を知ることににより最確値を求め、その値を近似値として繰り返し計算させることにより、精度を高めた。結果、一尺＝29.8316cm、造営の方位＝ $-0^{\circ}14'32''$ という値を得た。この計算結果をもとに条坊の位置を数値で示すことが可能になり、平安宮復原、さらに一町内の宅地割にまで検討が及ぶようになった。しかしながら、上記の値はデータが増すごとに多少変動することから年度ごとに計算を行い、現在では52のデータによる値を採用している。使用値は一尺＝29.83495cm、方位＝ $-0^{\circ}13'54''$ である。また、復原精度については最初の計算

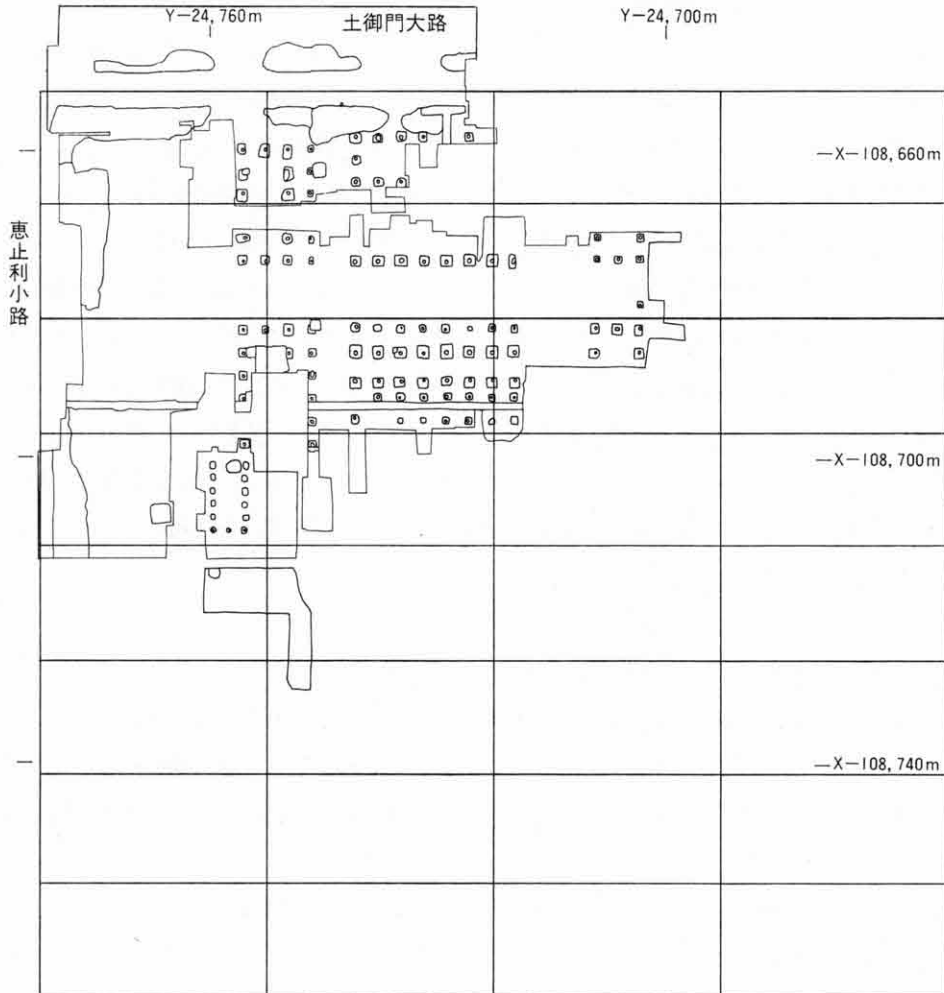
<<< ウキヨウ 1 ショウ 3 ホウ 9 チョウ >>>

MODEL 52
 ショウイ / ショウ = 29.83495cm
 ショウイ / フレ = 13'54"
 X = -189788.54m
 Y = -23258.19m

X,Y 座標 / 方位角 and ショウイ / フレ / フレ

1	11	21	31	41
2	12	22	32	42
3	13	23	33	43
4	14	24	34	44
5	15	25	35	45
6	16	26	36	46
7	17	27	37	47
8	18	28	38	48
9	19	29	39	49

- | | | | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1. X=-188652.18m
Y=-24782.28m | 11. X=-188651.97m
Y=-24752.45m | 21. X=-188651.85m
Y=-24722.61m | 31. X=-188651.73m
Y=-24692.78m | 41. X=-188651.61m
Y=-24662.94m |
| 2. X=-188667.81m
Y=-24782.22m | 12. X=-188666.89m
Y=-24752.39m | 22. X=-188666.77m
Y=-24722.55m | 32. X=-188666.65m
Y=-24692.72m | 42. X=-188666.53m
Y=-24662.88m |
| 3. X=-188681.93m
Y=-24782.16m | 13. X=-188681.81m
Y=-24752.33m | 23. X=-188681.69m
Y=-24722.49m | 33. X=-188681.57m
Y=-24692.66m | 43. X=-188681.45m
Y=-24662.82m |
| 4. X=-188696.85m
Y=-24782.18m | 14. X=-188696.73m
Y=-24752.27m | 24. X=-188696.61m
Y=-24722.43m | 34. X=-188696.49m
Y=-24692.60m | 44. X=-188696.36m
Y=-24662.76m |
| 5. X=-188711.76m
Y=-24782.84m | 15. X=-188711.64m
Y=-24752.21m | 25. X=-188711.52m
Y=-24722.37m | 35. X=-188711.40m
Y=-24692.54m | 45. X=-188711.28m
Y=-24662.70m |
| 6. X=-188726.68m
Y=-24781.98m | 16. X=-188726.56m
Y=-24752.14m | 26. X=-188726.44m
Y=-24722.31m | 36. X=-188726.32m
Y=-24692.48m | 46. X=-188726.20m
Y=-24662.64m |
| 7. X=-188741.68m
Y=-24781.92m | 17. X=-188741.48m
Y=-24752.88m | 27. X=-188741.36m
Y=-24722.25m | 37. X=-188741.24m
Y=-24692.42m | 47. X=-188741.12m
Y=-24662.58m |
| 8. X=-188756.52m
Y=-24781.86m | 18. X=-188756.40m
Y=-24752.82m | 28. X=-188756.28m
Y=-24722.19m | 38. X=-188756.15m
Y=-24692.35m | 48. X=-188756.03m
Y=-24662.52m |
| 9. X=-188771.43m
Y=-24781.80m | 19. X=-188771.31m
Y=-24751.96m | 29. X=-188771.19m
Y=-24722.13m | 39. X=-188771.07m
Y=-24692.29m | 49. X=-188770.95m
Y=-24662.46m |



第3図 平安京右京一条三坊九町調査平面図 (1/10,000)

<<< ウキヨウ 2 ショウ 3 ホウ 15 チョウ >>>

MODEL S2

メソッド / フレ = 29.83495cm

メソッド / フレ = 8°13'54"

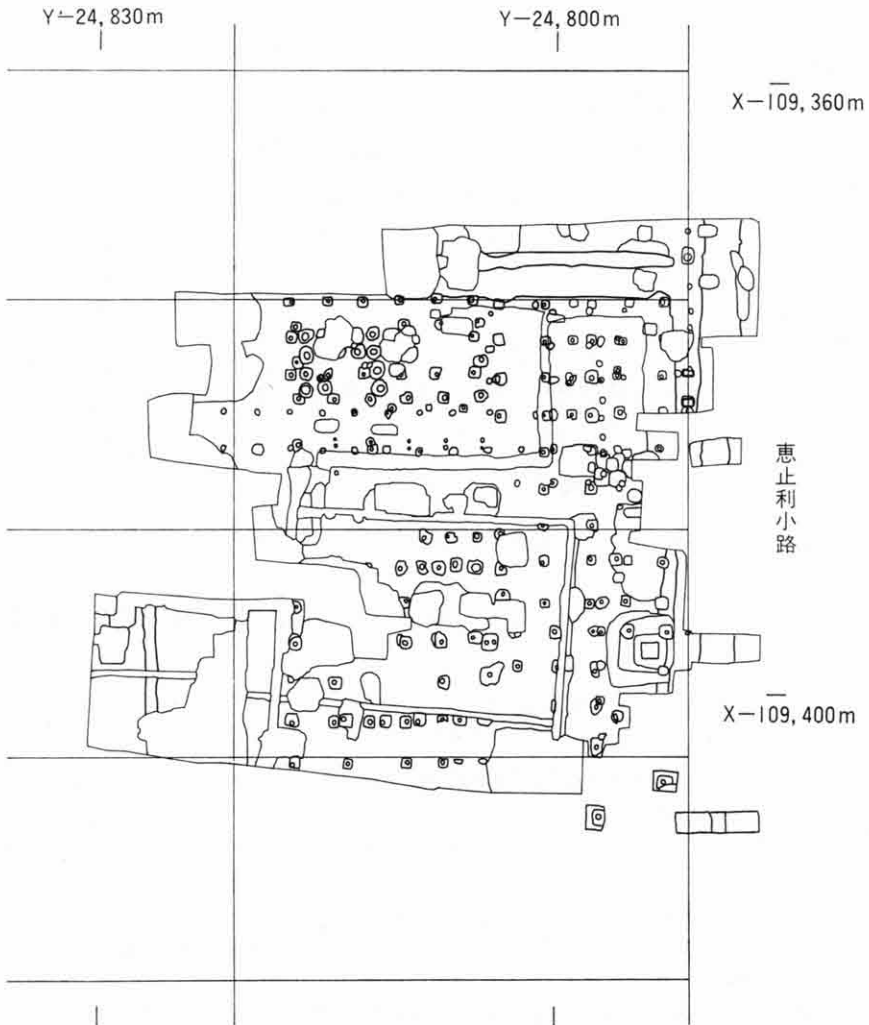
X = -189788.54m

Y = 23238.19m

X, Y の 誤り / 寸法 and 寸法の 誤り / 寸法

1	11	21	31	41
2	12	22	32	42
3	13	23	33	43
4	14	24	34	44
5	15	25	35	45
6	16	26	36	46
7	17	27	37	47
8	18	28	38	48
9	19	29	39	49

1. X=-189344.79m Y=-24918.76m	11. X=-189344.67m Y=-24888.92m	21. X=-189344.55m Y=-24851.89m	31. X=-189344.43m Y=-24821.25m	41. X=-189344.31m Y=-24791.42m
2. X=-189359.71m Y=-24918.69m	12. X=-189359.59m Y=-24888.86m	22. X=-189359.47m Y=-24851.83m	32. X=-189359.35m Y=-24821.19m	42. X=-189359.23m Y=-24791.36m
3. X=-189374.63m Y=-24918.63m	13. X=-189374.51m Y=-24888.80m	23. X=-189374.39m Y=-24851.77m	33. X=-189374.27m Y=-24821.13m	43. X=-189374.14m Y=-24791.30m
4. X=-189389.54m Y=-24918.57m	14. X=-189389.42m Y=-24888.74m	24. X=-189389.30m Y=-24851.70m	34. X=-189389.18m Y=-24821.07m	44. X=-189389.06m Y=-24791.24m
5. X=-189404.46m Y=-24918.51m	15. X=-189404.34m Y=-24888.68m	25. X=-189404.22m Y=-24851.64m	35. X=-189404.10m Y=-24821.01m	45. X=-189403.98m Y=-24791.18m
6. X=-189419.38m Y=-24918.45m	16. X=-189419.26m Y=-24888.62m	26. X=-189419.14m Y=-24851.58m	36. X=-189419.02m Y=-24820.95m	46. X=-189418.90m Y=-24791.11m
7. X=-189434.30m Y=-24918.39m	17. X=-189434.17m Y=-24888.56m	27. X=-189434.05m Y=-24851.52m	37. X=-189433.93m Y=-24820.91m	47. X=-189433.81m Y=-24791.05m
8. X=-189449.21m Y=-24918.33m	18. X=-189449.09m Y=-24888.50m	28. X=-189448.97m Y=-24851.46m	38. X=-189448.85m Y=-24820.87m	48. X=-189448.73m Y=-24790.99m
9. X=-189464.13m Y=-24918.27m	19. X=-189464.01m Y=-24888.44m	29. X=-189463.89m Y=-24851.40m	39. X=-189463.77m Y=-24820.81m	49. X=-189463.65m Y=-24790.93m

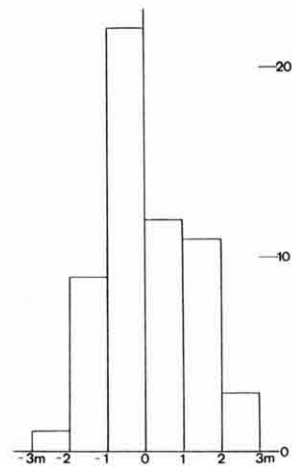


第4図 平安京右京二条三坊十五町調査平面図 (1/500)

では標準偏差が±1.8mあったものが、現在では±1.58mにまで減少している。次に、この条坊復原値を、実際の調査プラン図(平安京右京一条三坊九町(山城高校)^(注9)・右京二条三坊十五町^(注10))におおしてみると、右京一条三坊九町(第3図)では、調査地西端の南北溝は恵止利小路東築地のすぐ東になり、宅地内の溝となり、調査地北部の2本の東西溝は、北のものが土御門大路の南側溝、南のものが宅地内の溝になることがわかる。また、右京二条三坊十五町(第4図)では、調査区東端の溝が恵止利小路の西側溝、そのすぐ西にある柱穴列が西築地にあたる事が知れる。このように調査平面図に正確な条坊線を引くことにより、条坊から一町内の宅地割への問題へと成果を進めることになり、調査・研究の支援用として十分に活用できるものとなった。

5. ま と め

以上、平安京の条坊復原について考察したが、現在、平安時代の条坊遺構に関しては、想定線より3mを越えて検出されるものはまったくないと思われる^(注11)(第5図・第1表)。このことは条坊制がいかに正確に造られたかということをおもてあやためて確認させるものである。このように都城全体が高度な土木技術に支えられて造営されたことから、我々の調査における実測図の精度自体(基準点から調査地への測量精度)の保証が一方でなければならないのではと考える。今後、資料が増加し分析方法もいろいろな方面から進むこ



第5図 誤差分布図

とが予想されるが、そのもっとも基礎的なものとして測量精度をとらえていく必要があるだろう。

(つじ・じゅんいち=(財)京都市埋蔵文化財研究所研究職員)

注1 『史迹と美術』34-2 昭和39年

注2 『史跡西寺跡』 1977年

注3 東寺伽藍真〜西寺伽藍真の距離897.5m(2961.75現尺)を3,000尺で割った値、1尺=2.9916667m(0.987現尺)

注4 「平安京の造営尺について」では真北より西に15〜20'と、『史跡西寺跡』では22〜29'振れたものとしている。このラインの真北方向角は0°8'55''であるから、全体として、座標北に対し西に0°06'05''〜0°20'05''振れていることになる。

注5 「平安京を中心とした京都市域の埋蔵文化財発掘調査の記録方法の改善について」(『京都市文化観光資源調査会報告』) 昭和50年

注6 現在、京都市は1/2,500図の改測図作業を進めており、1990年には完了する。

注7 ここでの方位は座標北からのものである。

- 注8 12回ほど繰り返し計算させれば各値が一定し変動しなくなるが、設定は20回とした。
- 注9 平面図は京都府教育庁指導部文化財保護課技師 平良 泰久氏より(1/100 第2原図)提供されたものを編集した。
- 注10 『平安京跡発掘調査概報』 昭和61年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所)より編集した。第3図、第4図ともに平面図(S=1/100)をデジタイザーによりパソコンに入力したものを、プロッターにより出力し作図した。
- 注11 昭和63年1月末日現在、最新のデータによる計算では、造営の振れ= $-0^{\circ}14'08''\pm 22.8''$ 、造営尺(1丈)= $2.984858\text{m}\pm 0.000372\text{m}$ 、全体の標準偏差= $\pm 1.13938\text{m}$ である。(第1表参照)

番号	条 坊 名	誤 差	平安京座標	X 座 標	Y 座 標
1	カスカ ^N	2.443m	514.300 丈	-109330.45m	-24570.00m
2	オオミカト ^S	-0.654	462.000	-109487.10	-23948.00
3	オシ ^C	-1.494	318.000	-109919.00	-24249.00
4	アネコウジ ^S カヤ	-0.300	228.550	-110186.00	-24540.00
5	アネコウジ ^S	1.074	228.700	-110182.00	-24010.00
6	ニホリカワ ^C	0.331	-292.000	-111270.00	-24103.00
7	エド ^W サイツ	0.569	-520.000	-109376.00	-24791.10
8	コケイ ^C	-0.257	-246.000	-111528.66	-23965.22
9	ナジ ^W ヨウS	-0.514	-539.000	-112476.43	-24337.78
10	ナジ ^W ヨウS	-1.703	-539.000	-112475.70	-23870.94
11	カスカ ^S	-1.419	511.700	-109327.93	-21129.10
12	マサ ^N E	-0.997	655.300	-109327.97	-21284.73
13	トミ ^C	-0.249	698.000	-109578.00	-21155.50
14	ニジ ^W ヨウN	1.186	376.000	-109736.00	-22498.00
15	キョウ ナホ ^N コウ	-0.667	373.600	-109746.97	-22973.37
16	ロウカ ^N	-0.376	139.300	-110440.71	-21677.04
17	ヒク ^W チC	1.821	-222.000	-111516.95	-21676.85
18	ロウ ^W キ ^W カS	1.460	-267.300	-111656.00	-22522.00
19	ヨウ ^W カ ^W IS	1.816	-311.300	-111786.80	-22478.50
20	ヨウ ^W カ ^W IC	1.031	-310.000	-111780.37	-21667.24
21	ヨウ ^W カ ^W IS サイツ	-0.410	-312.000	-111795.10	-23448.00
22	ロウ ^W ヨウ ^W N	-0.822	-353.000	-111910.59	-21671.28
23	ロウ ^W ヨウ ^W N	-1.124	-353.000	-111910.80	-21649.00
24	サメウ ^C	1.184	-402.000	-112054.85	-21672.89
25	ナホ ^W カ ^W N	1.127	-444.700	-112189.00	-23288.00
26	ナホ ^W カ ^W C	1.009	-446.000	-112186.35	-21670.54
27	ナホ ^W カ ^W N	0.678	-444.700	-112182.51	-21599.79
28	キヨ ^C	-1.813	-490.000	-112320.50	-21668.78
29	シホ ^C	-0.534	-582.000	-112593.82	-21666.45
30	カチ ^W キ ^W カ ^W N	-0.674	-624.700	-112721.70	-21735.90
31	ヒク ^W チC	-0.484	-222.000	-111528.66	-23965.22
32	ニホリカワ ^C	-1.131	-292.000	-110020.00	-24109.60
33	ニホリカワ ^C イ	-1.298	-247.300	-109860.00	-23977.00
34	カラス ^W	-0.657	516.700	-110132.02	-21694.79
35	シツ ^W ヨウ ^W N サイツ	-2.845	8.000	-110841.00	-23114.00
36	ダ ^W ジ ^W ヨウ ^W カ ^W Nサイツ	-0.222	41.000	-109369.04	-23117.40
37	サツ ^W ヨウ ^W S サイツ	-0.160	180.000	-110328.70	-24035.00
38	ササ ^W ク W	0.625	-11.950	-112192.00	-23263.00
39	コウカモンE サイツ	0.139	-98.000	-112006.00	-23521.10
40	オオミカト ^S	0.650	462.000	-109480.00	-22538.00
41	ヒカ ^W シトウ ^W イ ^W M	2.075	561.000	-110090.00	-21560.00
42	ア ^W ラ ^W W	-0.958	336.700	-112655.00	-22222.00
43	カスカ ^S	2.066	511.700	-109338.30	-24500.00
44	カスカ ^N	0.235	514.300	-109335.00	-25140.00
45	サチ ^W ミカト ^S サイツ	-0.769	743.000	-108651.80	-24760.00
46	チョウト ^W ウイ ^W ン キヤカ ^W ロウ	-0.275	577.000	-109140.42	-23208.50
47	スイ ^W イ ^W セイセイモン ^W シ	-1.121	498.000	-109376.93	-23173.99
48	スイ ^W イ ^W ショウメイモン ^W シ	0.314	62.500	-109050.00	-23054.00
49	チュウ ^W シヨウ SD1	0.872	537.000	-109258.00	-23046.00
50	ミア ^W シヨウSサイツ	1.106	421.000	-109604.30	-23116.00
51	ミア ^W シヨウWサイツ	0.211	41.000	-109604.30	-23116.00
52	ア ^W ラ ^W ウイ ^W ン チョウ ^W クセン	0.547	-69.500	-109262.00	-23446.90
53	ア ^W ラ ^W Wサイツ	1.443	-340.000	-112574.70	-24239.80
54	ア ^W ラ ^W E	-0.464	339.300	-113457.00	-22210.45
55	オオイ ^W カ ^W イ ^W セン ^W ノミ ^W サ	-1.599	513.000	-109330.67	-22696.00
56	トウ ^W シ ^W Eサイツ	0.121	192.000	-113524.66	-22649.26
57	トウ ^W シ ^W Wサイツ	-0.031	108.000	-113525.08	-22900.14
58	サイツ ^W カ ^W ラ ^W ン ^W チュウ ^W クセン	-0.111	-150.000	-113522.72	-23670.33

条坊名のEは東、Wは西、Nは北、Sは南、Cはセンターである。

第1表 条坊遺構データ

高山古墳群(7・8・11・12号墳)の発掘調査

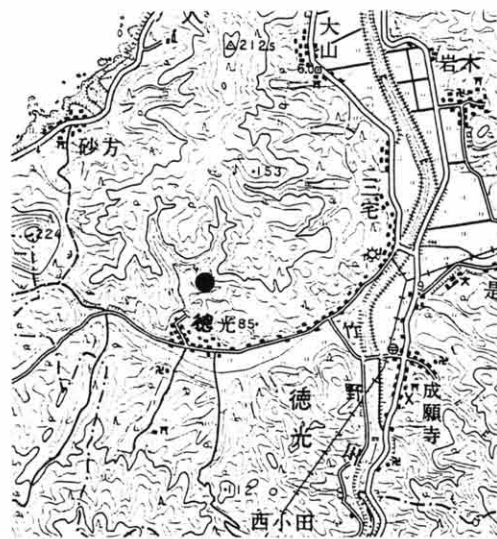
増田 孝彦

1. はじめに

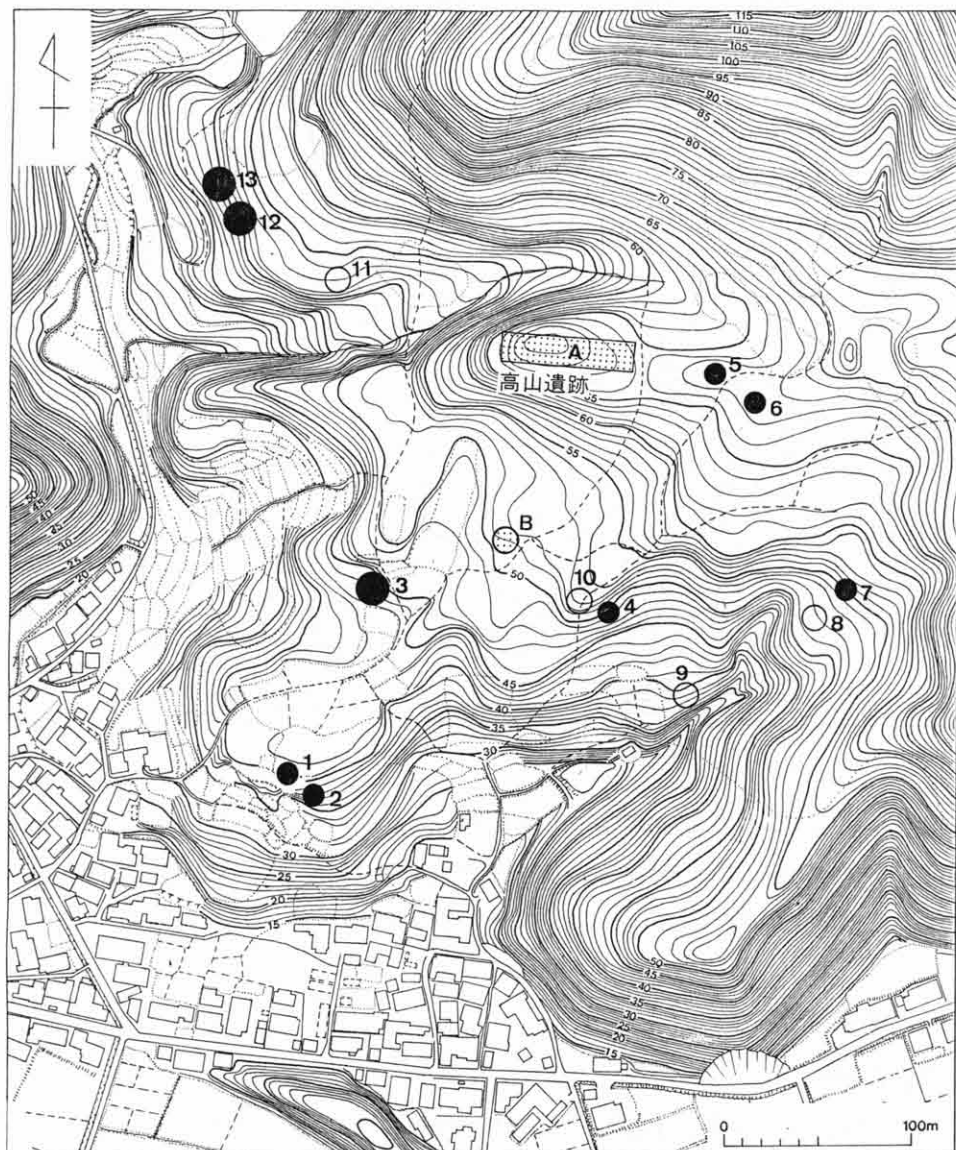
高山古墳群は、京都府の最北端、竹野郡丹後町字徳光小字椿原ほかに所在し、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の高山団地造成工事に伴い発掘調査を実施したものである。本古墳群は、丹後半島を北流する竹野川の一支流である徳良川左岸の丘陵上に立地しており、造成予定地内には13基古墳が確認されている。

調査は、昭和61・62年度の2年度にわたり実施した。昭和61年度調査は、6基の古墳、2か所の試掘、古墳周囲に広がる集石・積石を対象として、京都府教育委員会と当調査研究センターが分担して調査を行った。

その結果、古墳はいずれも横穴式石室を内部主体とし、6世紀後半～7世紀初頭に築造されたものであることが明らかとなった。また、盗掘を受けた痕跡がなく、開墾による墳丘の削平・石室の崩壊が見られただけで、石室内部は良好な保存状況であった。なかでも3号墳は特に遺存状況が良好で、追葬時の面がそのままの形で検出できた。1・3号墳からは、豊富な副葬品類が出土したが、このうち、1号墳からは鉄地金銅張雲珠、3号墳からは、銀装の刀装具(鏝)が1点出土した。刀装具に銀装を使用したものは、丹後地方では久美浜町湯舟坂2号墳・峰山町桃谷古墳に次ぎ3例目である。また、試掘地Aでは、石組みのカマドを有する竪穴式住居跡も検出された(高山遺跡)。住居跡周辺の掘削を行ったにもかかわらず、1基しか検出されず特異な状況を示す。集石・積石群については、墓塚がなく、集石・積石だけ残存するものと、火葬墓・土葬墓の3種類が検出された。これらの埋葬時期については、5号墳周囲にあった一石



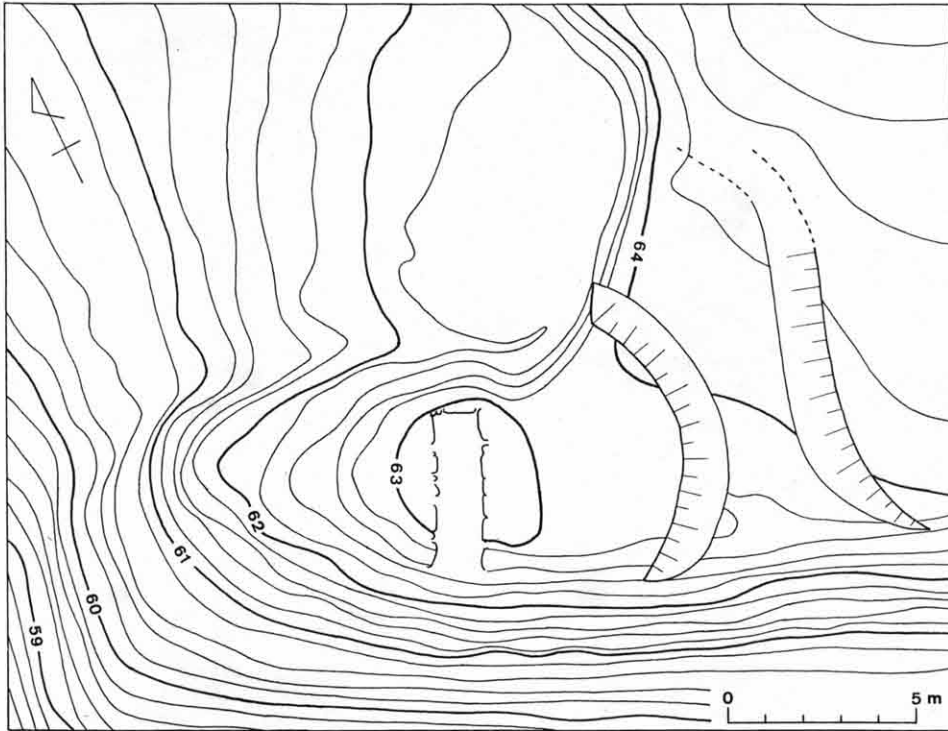
第1図 調査地位位置図(1/50,000)



第2図 丘陵遺跡分布図(数字は古墳番号, A・Bは試掘地)

五輪塔の一部には、天正11・12(1583・4)年の銘があり、周辺に存在する墓石のもっとも古いもので延宝3(1675)年であり、江戸時代中期以降の墓石は各所に見られることからすると、安土・桃山時代～江戸時代中期頃にかけてのものと思われる(昭和61年度調査については、『京都府埋蔵文化財情報』第25号を参照されたい)。

今年度の調査対象となったのは、7～12号墳までで、7・8・11・12号墳を当調査研究センターが、9・10号墳を京都府教育委員会が分担して調査を実施した。その結果、古墳



第3図 高山7号墳地形図

状隆起をなし、石室を思わせるかのように石材の散乱していた8～11号墳は、自然地形であることが明らかとなり、代って12号墳調査中に、新たに12号墳とほぼ同規模を有すると思われる13号墳が隣接して築かれていることが明らかとなった。

2. 調査概要

高山7号墳

造成予定地最西端に位置するもので、墳丘は開墾により大きく削られ、石材の散乱が認められた。直径約10mほどの円墳で、尾根高位側には自然地形を区画する浅い溝状の凹みが設けられている。石室は、南西に開口する無袖式横穴式石室で、全長4.1m・幅1.2～1.3mで入口部分がかつとも幅が広く、残存高1.2mを測る。入口付近には閉塞石が3段ほど残存する。高山古墳群中でも最も規模が小さい。石室の石積みは、自然石乱石積みで比較的大きさの整った石材を用いている。最下段に用いられている石材がかつとも大きく、奥壁で1段、側壁で1～3段が残存している。使用されている石材は、安山岩と凝灰岩であり、いずれも付近一帯の丘陵に分布する石材である。

遺物は、土器類はほとんどが細片化しており、唯一須恵器杯身・杯蓋が1セット認めら

れただけで、鉄器類についても原形を保つものは少なく、刀・刀子が奥壁西隅にかたづけられた状態で約7本分が出土したにすぎず、古墳群中もっとも遺物が少ない。このように遺物が少なく、細片化していることは、閉塞石内側付近が後に火葬墓として利用されたことによるものか、火葬骨片が多量に出土している。

出土した遺物から、7号墳は6世紀後半に築造されたと考えられる。追葬時期については、遺物が細片化しているため不明であるが、後に火葬墓として再利用されている。

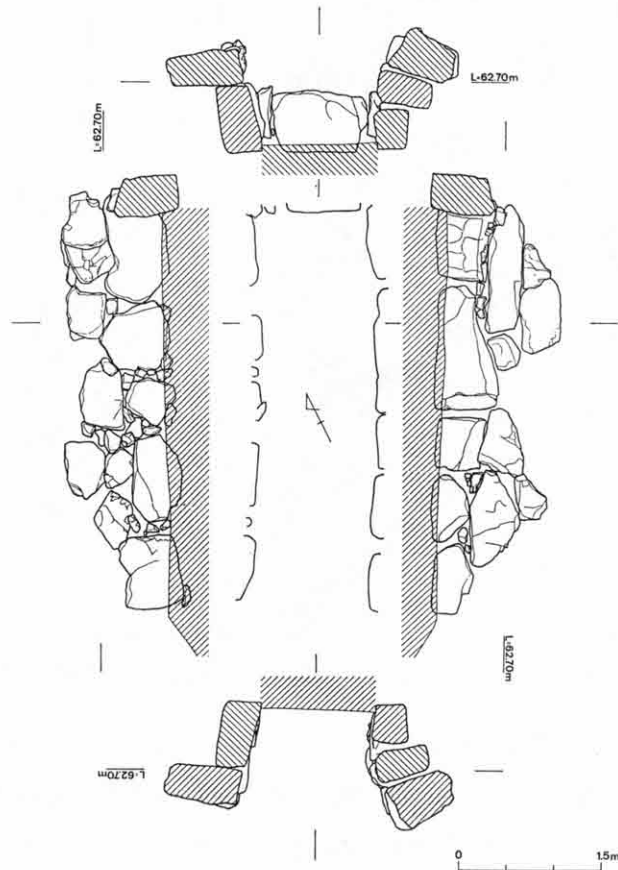
高山12号墳

造成予定地最北端に位置し、下方には日本海(丹後町字砂方)と最短距離で結ぶ旧街道が通じている。

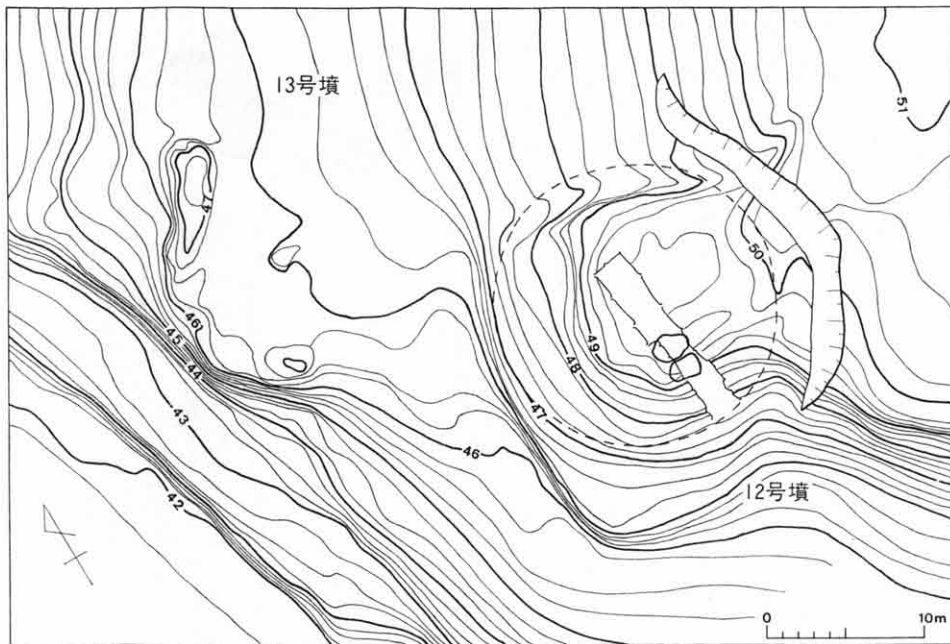
墳丘・基底部は開墾により大きく削られ、北側は竹林となっており、調査結果に見られる大古墳は想像されなかった。墳丘は、直径18mの円墳で、墳丘東側には尾根と区画する溝(幅7m・深さ1.6m)が設けられている。

石室は、西側に袖をもつ片袖式横穴式石室で、南南西に開口する。石室全長12m・玄室長5.9m・同幅2.1~2.3m・同高2.9m・羨道幅(入口付近)2.1m・玄門幅1.7m・高さ1.7mを測り、玄室と羨道の長さは、ほぼ1:1である。高山古墳群中最大規模を誇り、丹後半島でも最大級クラスの石室と判明した。

天井石は、羨道部に2石残存していたが、玄門部に残存するものを除き、ズレが著しく側壁に乗っておらず、調査上危険なため除去した。また、玄室天井部と羨道天井部とは、約1.2mの段差が認められる。羨道部に残存していた天井石の規模から考えると、玄室部分には、4石の天井石が架せられていたと推定され、羨道部には少なくとも3石からなる天



第4図 高山7号墳石室実測図

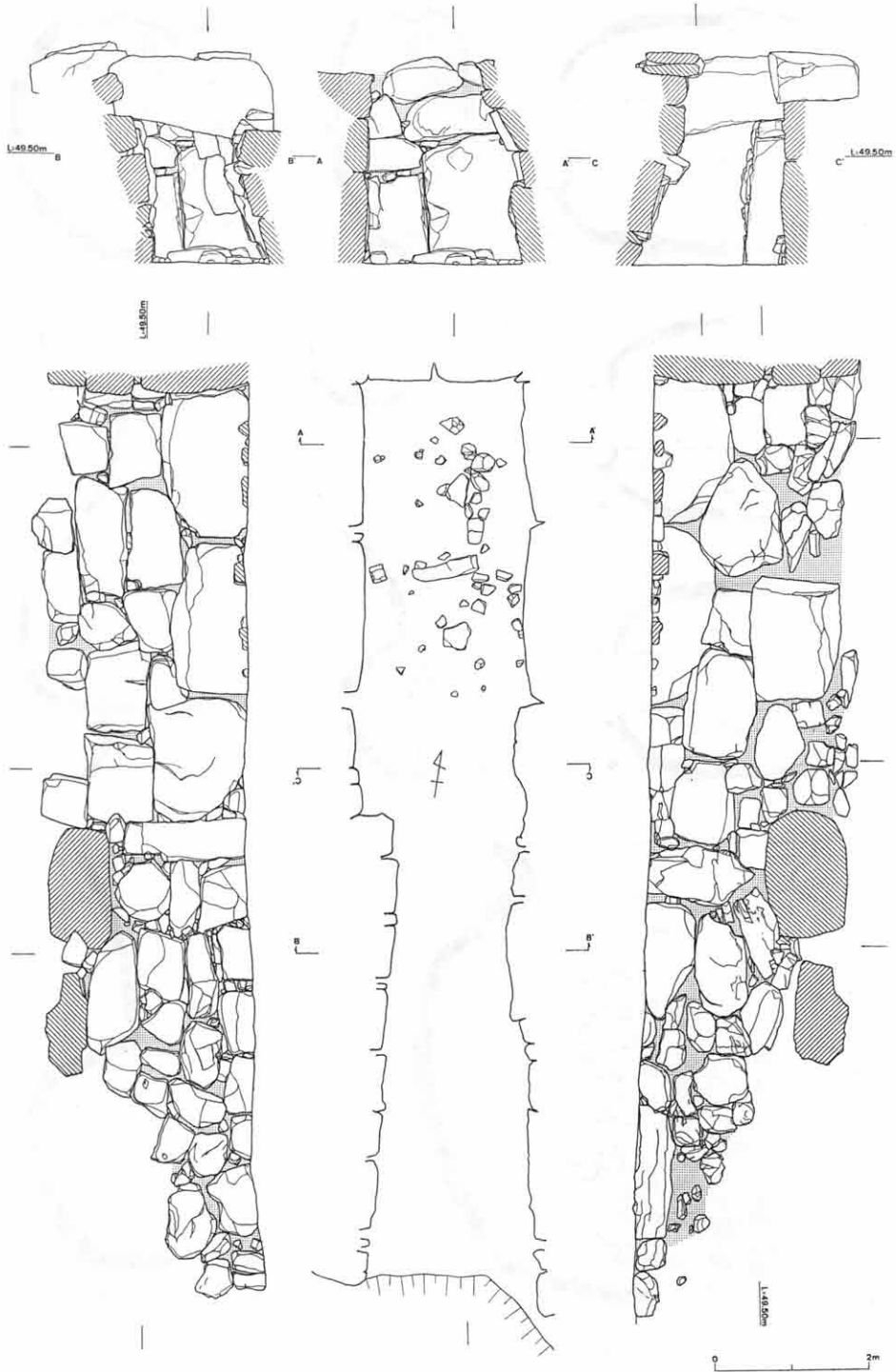


第5図 高山12・13号墳地形図

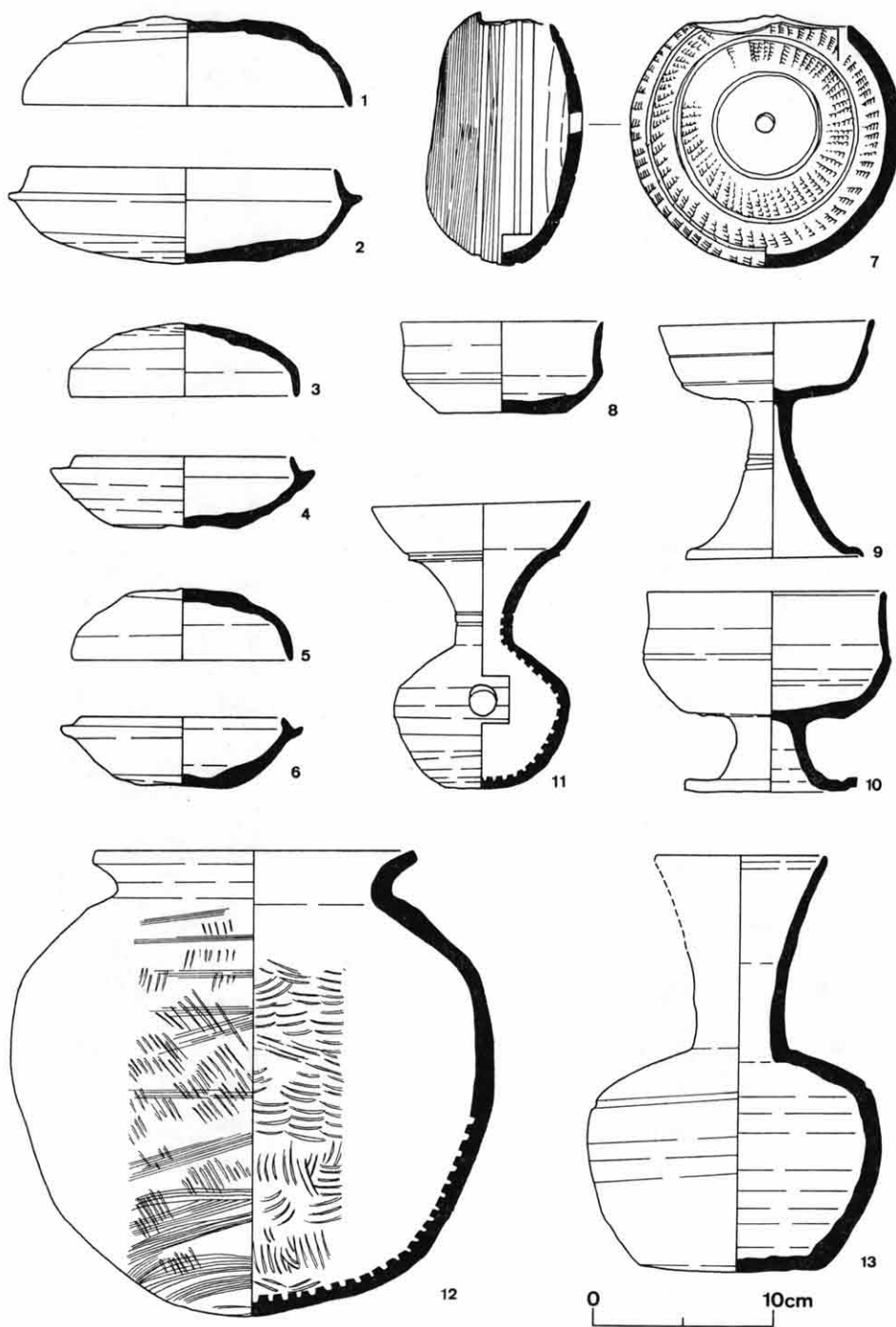
井石が考えられる。

石室は、全体的に西に傾いており、特に東側壁は上段の石材ほど玄室側にズレ込んでおり、もっともズレ込んだ部分では、両側壁間が0.8mしかあいておらず、調査上危険なため、玄門部より奥壁手前2mまでの東側壁は、最下段の石材を除きすべて除去した。石室の石積みは、他の古墳が自然石乱石積みであるのに対し、12号墳は割石や、自然石でも比較的面の整った大きな石材を用いている。玄室奥壁で3段、側壁で3～5段、羨道部で2～4段にわたり積み上げられている。使用されている石材は、概して玄室側が羨道部より大きく、玄室側壁最下段は3石により構成されている。石材は、凝灰岩と安山岩が用いられているが、凝灰岩は主として天井石・玄室最下段の基底石に使用されている。この玄室最下段に用いられた凝灰岩には、石材の面を整えるために削った鑿跡が全面に認められた。玄室内では、棺台として使用されたと思われる石列を一部確認したが、木棺を安置していた位置を特定するには至らなかった。羨道部では、玄門より外側1mの所で4段程度残存する閉塞石を認めたが、追葬時に壊されたようで、石材が広く羨道部に散乱していた。

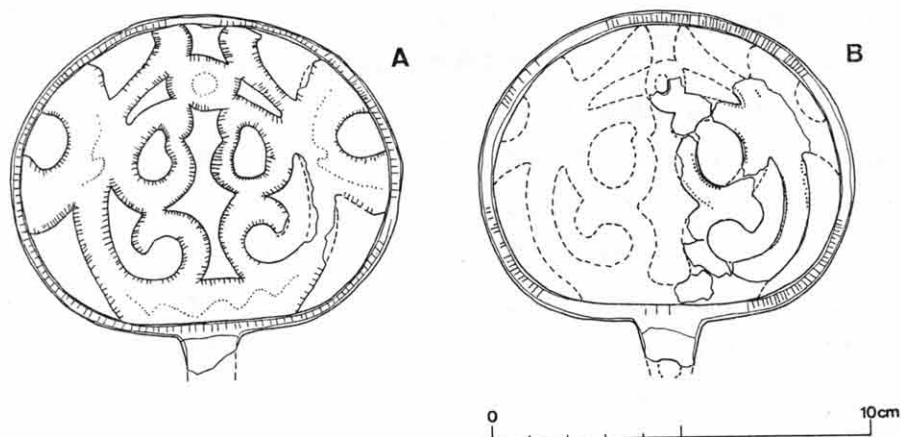
遺物は、古墳群中もっとも多く玉類(勾玉、切子玉、ガラス玉、管玉)58点をもち、豊富な鉄器類、とりわけ中でも、金銅装双龍環頭大刀柄頭、金銅装喰出鐔、鉄地金銅張辻金具、鞍金具、革金具等の装飾性の高い刀装具・馬具類は特筆される。また、全国で7例目



第6図 高山12号墳石室実測図



第7图 高山7・12号墳出土遺物 1・2：7号墳，3～13：12号墳



第8図 金銅装双龍環頭大刀柄頭

	A 環 頭	B 環 頭
縦	8.7cm	8.0cm
横	10.4cm	10 cm
幅	0.9cm	0.9cm
厚	0.3cm	0.5cm
茎 幅	1.6cm	1.9cm
茎 現 存 長	1.0cm	1.2cm
重 量	43 g	54 g

金銅装双龍環頭大刀柄頭計測値

の出土となった特殊扁壺は、その分布という点からも注目される。これらの遺物は、追葬が行われるたびにかたづけられたようで、閉塞石と玄門の間、閉塞石中、袖石付近に集中して出土している。玉類についても、棺台付近、閉塞石中、石室前面からも出土し、分散している。また石室前面には、追葬時にかき出されたと思われる土器類が、破片として多量に散乱していた。

出土した遺物からすると、12号墳は6世紀末頃に築造され、7世紀前半に数次の追葬を行い、7

世紀末～8世紀にかけ最終追葬が行われたと考えられる。このうち、7世紀初頭頃に比定される土器類がもっとも多く出土した。

3. 金銅装双龍環頭大刀柄頭

石室入口より、約2.5m入った羨道部の散乱した閉塞石上より、環頭2点がほぼ同じ高さで0.4m離れて出土した。1点は双龍環頭(A)であったが、残る1点は環体(B)のみであった。B環頭の龍文については、閉塞石内側の玄門付近3か所からその部分が出土し、ほぼ一頭分が復元できた。環頭のみ出土であることや、龍文が脱落し細片化していることなどから、追葬時に石室内がかたづけられた際に分散したと思われる。A・B環頭とも、環体はやや下半が膨む楕円形に作り、環体側面には細かい刻み目を施す。環体の厚さは、B環頭の方がやや厚い。龍文は、2頭の龍が向い合い玉を噛む形状を表すが、形式

的にはかなり退化したものである。A環頭では、龍周囲に細かい刻み目が施され、玉内部、龍体部・基部には列点が認められる。B環頭では、龍周囲には刻み目を施さず、代って列点が認められるが、体部・基部にはA環頭のように列点はみられない。玉は、A環頭が列点で表現されていたのに対し、現状の透文となっている。渡金の状態は、環体、龍文ともA環頭が良好で、B環頭では、環体はほとんど欠落しているが、龍文は残存状況に比して残りはよいといえる。A・B環頭とも龍文は別作りで、環体内側にはめ込む。

型式年代は、久美浜町「湯舟坂2号墳」の環頭大刀編年(新納 泉氏)では、Ⅳ式(代表例 千葉県金鈴塚古墳)とされている。龍文が退化し、双龍環頭の編年ではもっとも新しい時期に属するもので7世紀前半頃に比定されている。なお、出土遺物からすれば、7世紀初頭と考えられる。大刀部分については、石室内、石室前面とも出土しなかった。

双龍・双鳳環頭大刀は、日本国内で約60例近くが出土しているが、このうち京都府下出土の双龍環頭は、久美浜町湯舟坂2号墳(4龍)と、夜久野町今西中の2例がある。また、本古墳のように、同一古墳から複数の環頭大刀が出土した例としては、千葉県金鈴塚古墳、静岡県山ノ崎古墳の2例が知られている。

環頭大刀の性格については、「軍事政権の象徴として、中央の政権から地方の政権に分与されたもの」とみる意見(新納氏)と、大和地方からの出土例が知られていないことから、別の分与ルートを想定する意見がある。

4. ま と め

高山12号墳出土の鉄製品(武器・馬具等)、土器類、玉類等の豊富な副葬品数は、古墳群中傑出している。とりわけ、装飾性の高い金銅張製品が多い点は注目される。環頭大刀が出土する古墳は、地域あるいは古墳群中でも特に規模が大きいものに限られるようである。出土遺物、石室規模からすると、被葬者は竹野川下流域を中心とする比較的広範囲に支配基盤を置く豪族層と考えられる。

いずれにせよ、京都府下出土の双龍環頭大刀出土古墳が丹波・丹後に集中していることは注目される。6年前に湯舟坂2号墳で被葬者の政治勢力について脚光を浴びたが、大和政権との関係だけでなく、広く日本海沿岸の周辺地域との関係も今後の検討課題であろう。また、全国で7例目の出土となった特殊扁壺は、従来、東海地方やその周辺地域のみ出土しており、日本海側では初の出土であり、今後、その分布範囲は広がるものと思われる。

(ますだ・たかひこ=当センター調査第2課調査第1係調査員)

栗ヶ丘横穴群について

引原 茂 治

1. はじめに

「栗ヶ丘」というのは、小字名などのいわゆる地名ではない。命名のくわしい経緯はわからないが、かつて遺跡分布調査が行われた時に、栗の木がある丘という意味で名付けられたという説もある。正しくは、綾部市小呂町田坂である。

この栗ヶ丘には、古墳があることが知られていたが、近年、綾部工業団地の造成が計画された。それで、造成工事に先立ち、昭和60年度から62年度にかけて、古墳などの発掘調査を実施した。^(註1)

栗ヶ丘の古墳群は、12基の円墳からなっている。60年度には3・5号墳を、61年度には1・2・4・6・7・8・9・11・12号墳を調査した。10号墳は、現地保存されるので、調査は行っていない。61年度の調査中に、古墳群内に工事用道路が敷設され、その際に丘陵断面に逆台形状の黒色土の落ち込みが露呈した。なんらかの遺構とみられたので、62年度に調査を行った。その結果、それが横穴であることが判明し、あわせて周辺の調査を行った結果、さらに2基の横穴と、墓とみられる土塚10基を検出した。



第1図 位置図 (1/25,000)

2. 横 穴 群

横穴群は、北西側に開口する谷の最奥部にある。この谷の最奥部には、栗ヶ丘5・6号墳のある丘陵が張り出し、東西方向と南北方向の支谷に分岐し、Y字状の谷となる。横穴群があるのは、分岐点付近から東西方向の支谷にかけての斜面である。南北方向の支谷には、工事用道路が貫通しており、横穴の存否は不明である。

(1) 1号横穴(第2図1)

5号墳西側の丘陵斜面に位置する。ほぼ東西方向に主軸をもち西方向に開口する。先端部が工事用道路で削られているが、残存する限りでは、全長6.4m、玄室長2.9m・幅1.3m、羨道長3.5m・幅0.9mである。天井部は落盤しているが、落盤土の範囲からみて、玄室のみに天井があったものとみられる。

床面の形状からみると、玄室と羨道の境はあまり明瞭ではないが、若干のくびれがみられる。玄室床面の平面形は、やや台形気味の隅丸長方形である。玄室から羨道にかけて幅20~50cm・深さ10cm以下の排水溝を設ける。副葬品の出土状況などから、追葬はなかったものとみられる。

(2) 2号横穴(第2図2)

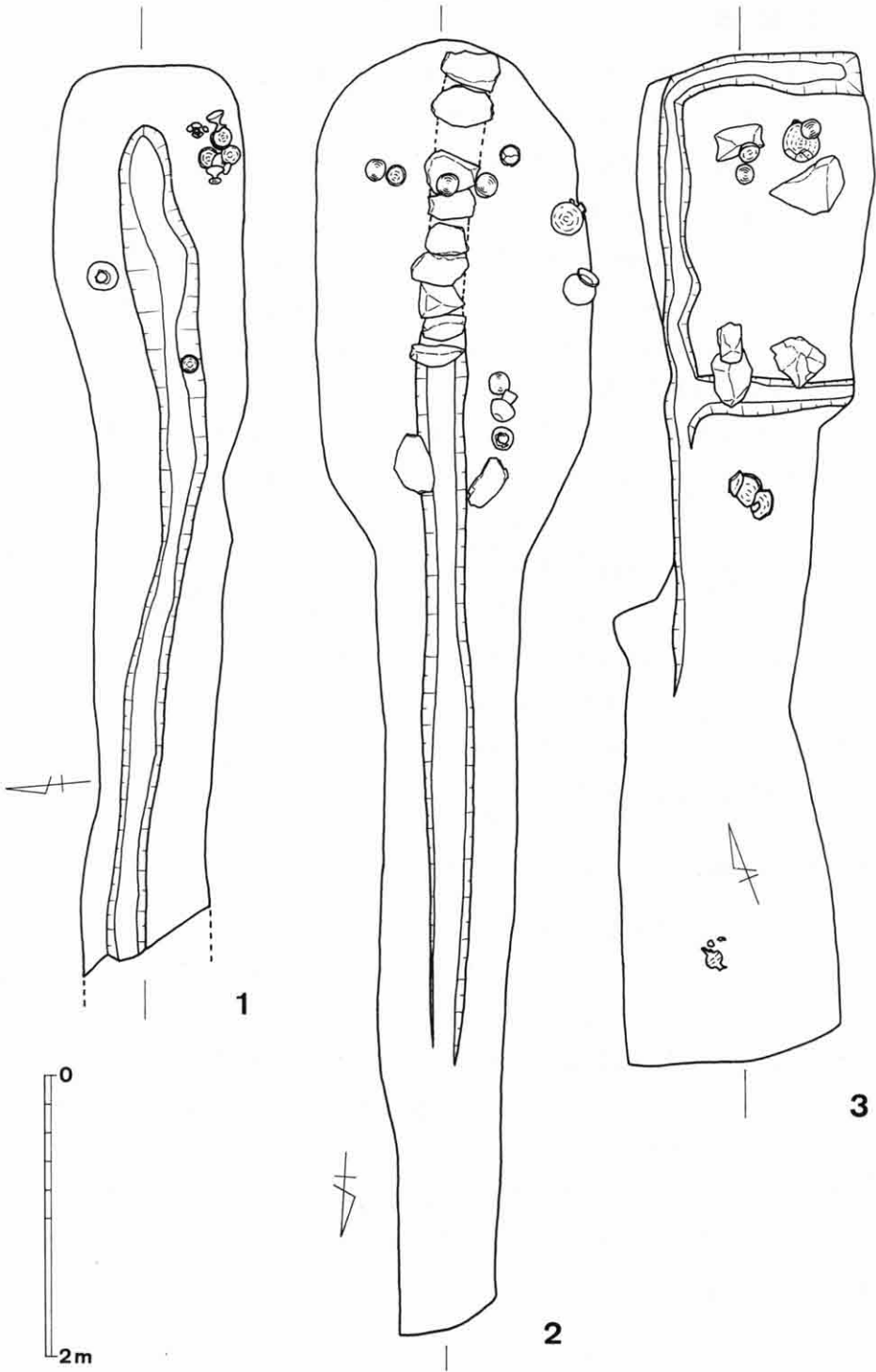
5号墳北側の丘陵斜面に位置する。ほぼ南北方向に主軸をもち、北方向に開口する。全長9m、玄室長3.5m・幅1.9m、羨道長5.5m・幅0.9mである。天井部は、玄室奥壁付近以外は落盤しているが、落盤土の範囲からみて、玄室のみに天井があったものとみられる。

玄室床面の平面形は、隅丸長方形というよりもいわゆる「小判」形であり、羨道も含めた全体の形状は、いわゆる「しゃもじ」形である。玄室奥壁部から羨道にかけて幅30~40cm・深さ10cm以下の排水溝を設ける。この排水溝は、玄室部では蓋石を置いている。また、玄門付近に、排水溝をはさんで2個の石が置かれている。排水溝の蓋石とともに棺台となっていたものか。副葬品の出土状況などから、追葬はなかったものとみられる。

(3) 3号横穴(第2図3)

3号墳南側の丘陵斜面に位置する。ほぼ北東から南西に主軸をもち、南西方向に開口する。この横穴は、羨道前面が幅広く、前庭部状になる。全長7.1m、玄室長2.7m・幅1.7m、羨道長1.9m・幅0.9m、前庭部長2.5m・幅1.8mである。天井部は落盤しているが、落盤土の範囲からみて、玄室のみに天井があったものとみられる。

玄室床面の平面形は、台形気味の長方形である。玄室奥壁から北西側壁に沿って排水溝がめぐる。玄門付近にも主軸に直交する排水溝があり、玄室西隅で合流し、「F」字状となる。玄室中央からやや南東側壁寄りに、棺台とみられる石が4か所に置かれる。副葬品の出土状況などから、追葬はなかったものとみられる。



第2図 横穴床面平面図

3. 土 塚 群

3号墳南側，3号横穴東側の丘陵斜面に位置する。土塚の総数は10基である。ほぼ長方形の平面形をもつ。斜面の等高線に平行して掘られているもの(主軸が東西方向)と直交して掘られているもの(主軸が南北方向)がある。

土塚の規模をみると，幅は0.8～1.1mと，大差はない。長さでは，4パターンに大別できる。すなわち，A. 3m前後のものが3基，B. 2.5m前後のものが4基，C. 2m弱のものが1基，D. 1m強のものが1基である。なお，崩落のために長さ不明のものが1基ある。このうち，Aと，Bのうちの2基および長さ不明のものは，主軸が南北方向のもので，そのほかは，主軸が東西方向である。

位置的には，東西方向に主軸をもつものは斜面の上方の緩傾斜地にある。南北方向に主軸をもつものは，それより下方のやや傾斜のきつい場所に位置する。そのために，南北方向に主軸をもつものは，土塚床面も傾斜している。

これらの土塚は，形状や遺物の出土状態から，墓とみられる。

なお，Aに属する土塚のうちの2基からは，遺体の頭部方向であったとみられる土塚北端部から，一方は土師器，一方は須恵器であるが，高杯6個体が3個体ずつ2列に並べられた状態で出土している。埋葬時の供献のなされかたの一例といえよう。また，この2基の土塚から出土した土器の数は，他の土塚を上回るのみならず，古墳の主体部や横穴から出土した土器の数と較べても，上回るか，もしくは匹敵するものである。

4. 出 土 遺 物

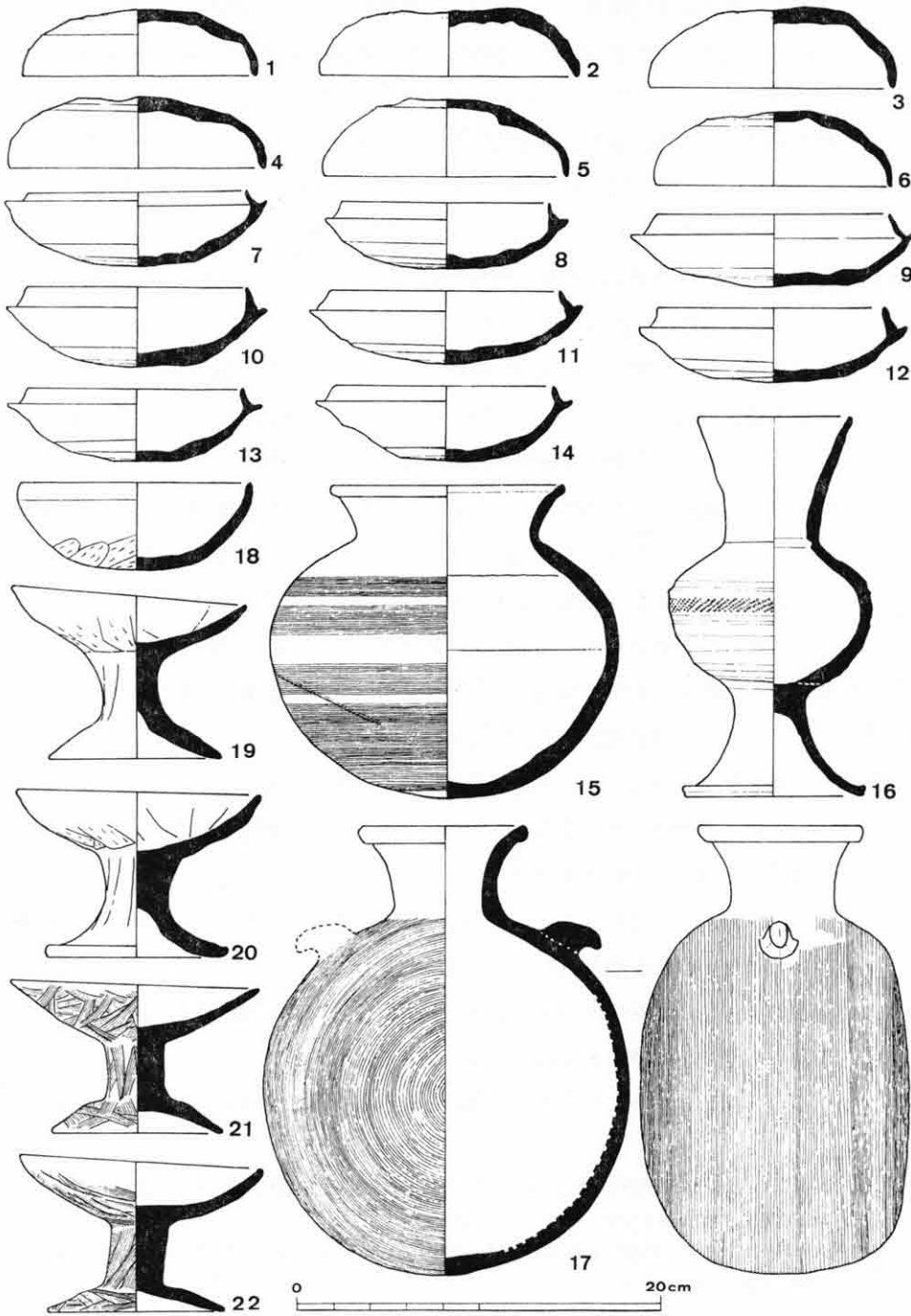
横穴群や土塚群から出土した遺物は，須恵器・土師器の土器類が主で，刀子・鏃などの鉄製品が少量ある。また，2号横穴からはガラス製小玉2点と珪化木製棗玉1点が，土塚からは砥石1点が出土している。

横穴から出土した須恵器は，陶邑編年^(注2)のⅡ形式4段階から5段階に並行するものとみられる。6世紀後半から末頃とみられるが，1号横穴出土のものが，他の横穴出土のものよりやや古い様相を示す。

土塚から出土した須恵器は，古いものではⅡ形式3段階に並行するものがある。6世紀中葉頃か。新しいものではⅡ形式6段階に近いものもあり，6世紀末から7世紀初頭ころとみられる。

5. ま と め

京都府下においては，丹後地域の中郡峰山町・大宮町周辺，南山城地域の八幡市・綴喜



第3図 横穴出土遺物実測図

郡田辺町周辺に、横穴が多数確認されている。綾部市を含む丹波地域では、ほとんどその存在が知られておらず、綾部市小呂町の小谷横穴と船井郡瑞穂町三ノ宮の三ノ宮校裏山横穴が『京都府遺跡地図』に記載されているのみである。丹後や南山城の状況からみて、横穴はある程度限られた地域に存在する傾向があり、上記丹波の2例および栗ヶ丘横穴群の存在を考慮すると、広くみれば北丹波地域、狭くみれば「吉美」と通称される小谷・栗ヶ丘の横穴がある地域周辺には、さらに横穴が存在する可能性がある。

この横穴群は、6世紀後半から末頃にかけて築造されたものとみられる。府下他地域の例からみると、横穴築造の盛行期は7世紀である。その点では、この横穴は府下では古いものといえるが、なぜその築造が短期間で途絶えてしまうのかが問題である。

この横穴群の横穴の特色の一つとして、排水溝をもつことがあげられよう。2号横穴では、その上に蓋石を置く。あたかも横穴式石室を意識したかの感がある。

土塚については、東西方向主軸のものと南北方向主軸のもの2種があることは、上述したとおりである。土塚のなかには、遺物が出土しなかったものや時期判定基準となる土器が出土しなかったものもあり、断定はできないが、前者が後者に先行するようすである。

栗ヶ丘では、6世紀前半から中葉にかけて古墳築造が盛行し、後半頃に終了する。そして、6世紀後半から末頃にかけて横穴が営まれる。土塚は、古墳築造盛行期の6世紀中葉頃には造られており、6世紀末から7世紀初頭頃まで続く。

土塚は傾斜地に設けられており、古墳がある丘陵上平坦地にはない。昨年度、7～9・11号墳がある丘陵上平坦地をほぼ全面的に掘削したが、何等の遺構も存在しなかった。土塚を設ける場所は、何らかの制限を受けているのではないか。

古墳や横穴は、在地の有力者の墓とみられるが、土塚も、遺物数からすればそれに匹敵する。そういう点で土塚も在地有力者に近い者の墓とみることもできる。しかし、古墳・横穴と土塚という、いわゆる墓の形態の違いや、墓の設営場所の制限を想定すると、在地有力者のなかにも何らかの格差・規制があったことを窺わせる。

(ひきはら・しげはる=当センター調査第2課調査第1係主任調査員)

注1 伊野近富「栗ヶ丘古墳群昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

引原茂治「栗ヶ丘古墳群昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注2 中村宏ほか『陶邑』Ⅲ・Ⅳ (大阪府文化財調査報告書 第30・31輯 大阪府教育委員会) 1978・1979

上人ヶ平遺跡の発掘調査

——弥生・古墳時代の概観——

小池 寛

1. はじめに

上人ヶ平遺跡の調査は、関西文化・学術研究都市の開発に伴う事前調査であり、住宅・都市整備公団の依頼を受けて実施したものである。調査は、調査第2課調査第3係長 小山雅人、主任調査員 戸原和人、調査員 小池 寛・岩松 保・伊賀高弘・石尾政信が担当し、昭和62年4月15日～同11月30日の期間で行った。

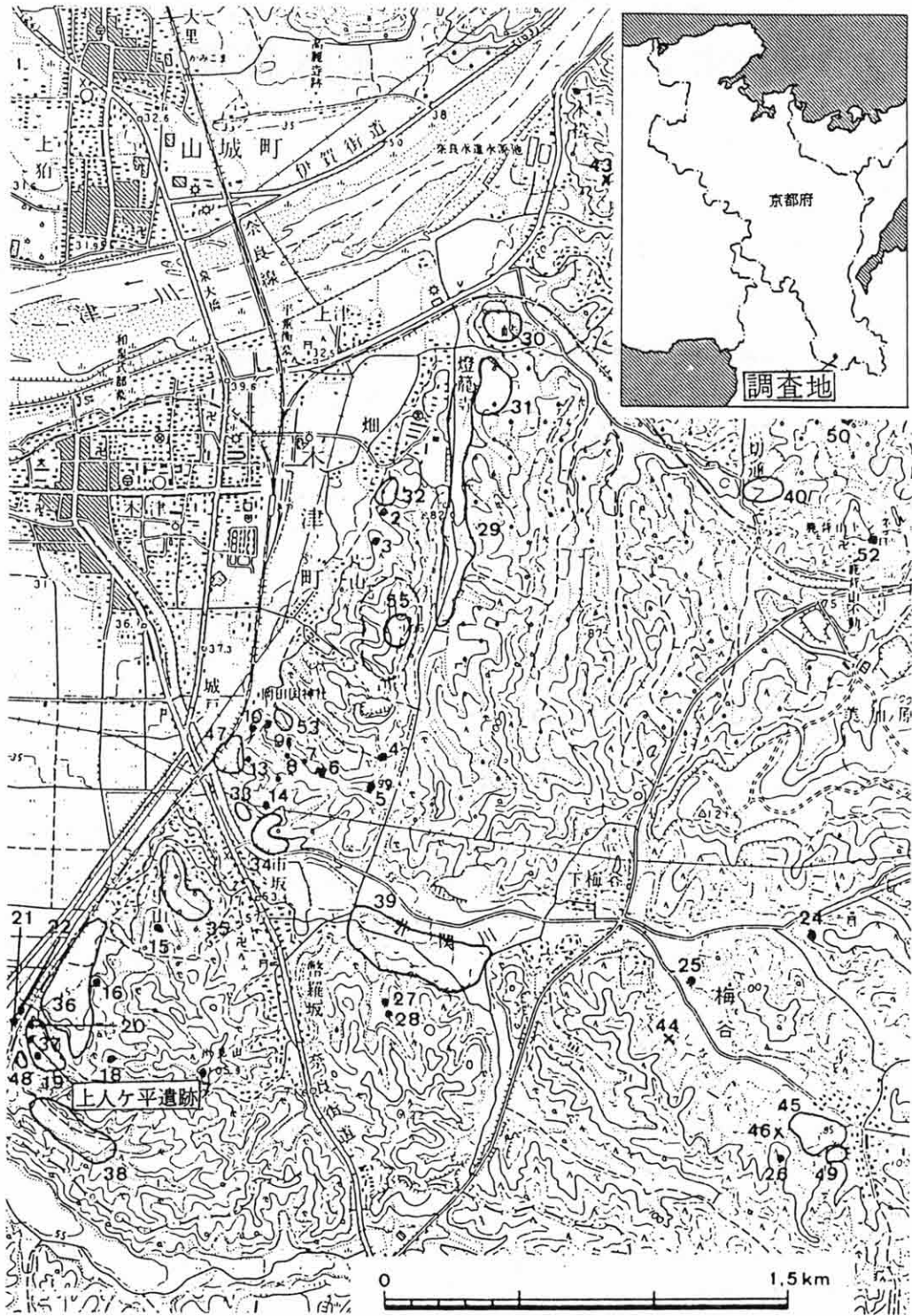
上人ヶ平遺跡は、相楽郡木津町大字市坂小字上人ヶ平に所在し、一筆毎に付された地割(番地の略号btを使用)を基準にトレンチを設定した。調査を行った番地は、3・6・8・19・21・30・34・35・36の計9か所に及ぶ。検出した遺構は、弥生時代後期から奈良時代にまで及ぶが、本概要では、一つのまとまりとしてとらえられる古墳時代までとし、以降については、後日に報告したい。

2. 調査概要(第1・2図)

本遺跡は、木津町東部丘陵の最も突出した平坦な丘陵上に位置し、標高は54～58mを測る。また、平野部との比高差は15m以上を測り、平野部や対岸の丘陵が一望でき、住居・墓地を選地する上で好条件であったことがわかる。上人ヶ平遺跡が立地する丘陵は、上人ヶ平5号墳から、3btにかけての主尾根と、そこから谷部へ派生する2本の支尾根に分けることができ、東端支尾根(34・35・36bt)では、布留式併行期の集落跡、中央支尾根(6・19bt他)では、庄内式から布留式併行期の墓を確認している。古墳は、先述した主尾根上に築造されており、現在10基を数える。以下、時代毎に概観したい。

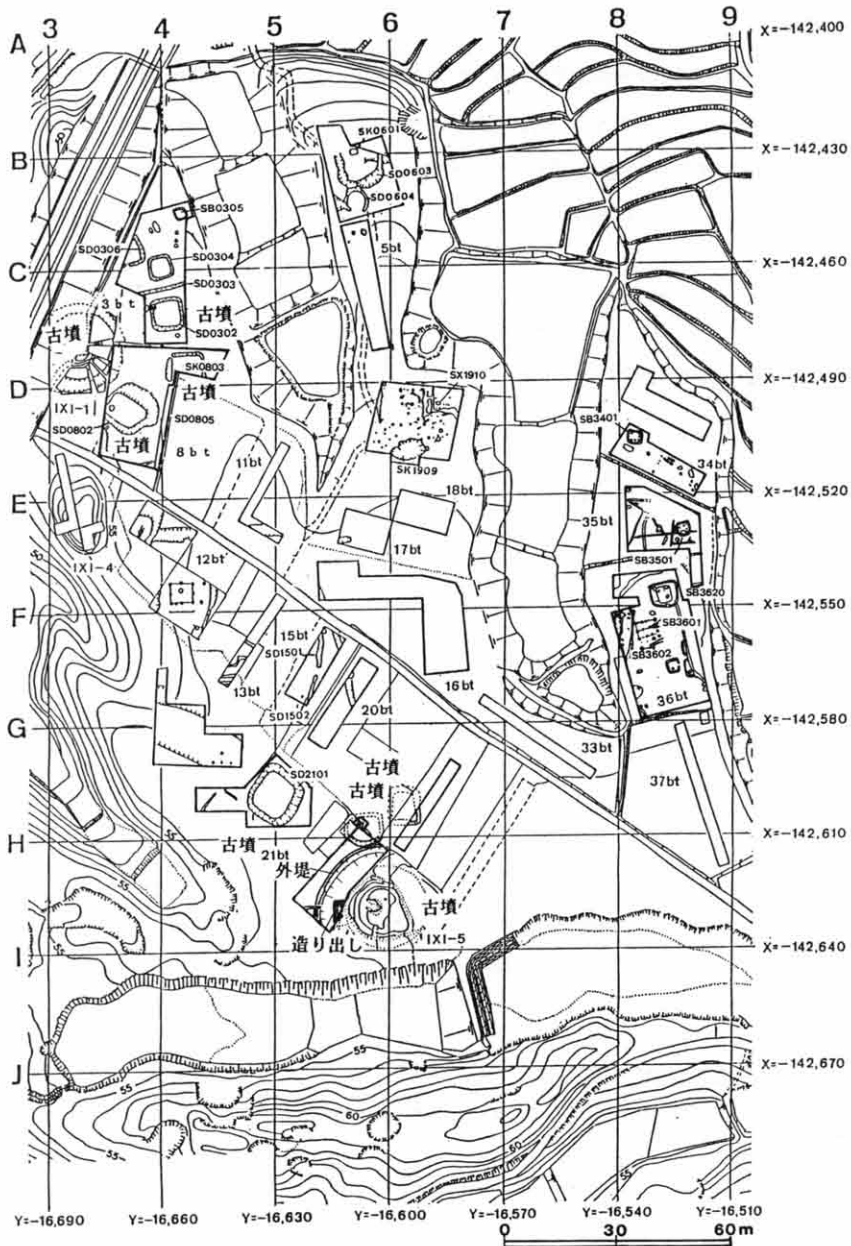
(1) 弥生時代(第2・3図)

明確な遺構としては、3btで検出した竪穴式住居跡(SB0305)一基のみである。住居跡は、一辺5mの正方形に近似する平面プランを有し、検出面から床面までは30cmを測る。周壁溝は、幅15cm・深さ5cmを測り、床面には、約2m間隔に四柱の穴が穿たれている。床面中央には、直径60cmの土坑があり、ここから北隅部にかけて幅30cm・深さ10cmの溝が一条掘られている。東南面中央には、80cm×50cmの長方形の落ち込みがあり、出入口の可



第1図 調査地位置図

能性が極めて高い。床面には、赤褐色に焼けた土がほぼ全面に広がり、建築部材が炭化した状態で散乱している。出土遺物には、弥生土器・砥石等があり、土器(第5図3)は、鉢6点・甕2点で、そのいずれもが完形品である。これらの状況から、この住居跡は、火災により倒壊したと考えられる。なお、住居跡中央部で検出した土壇と北隅部へかけて掘ら

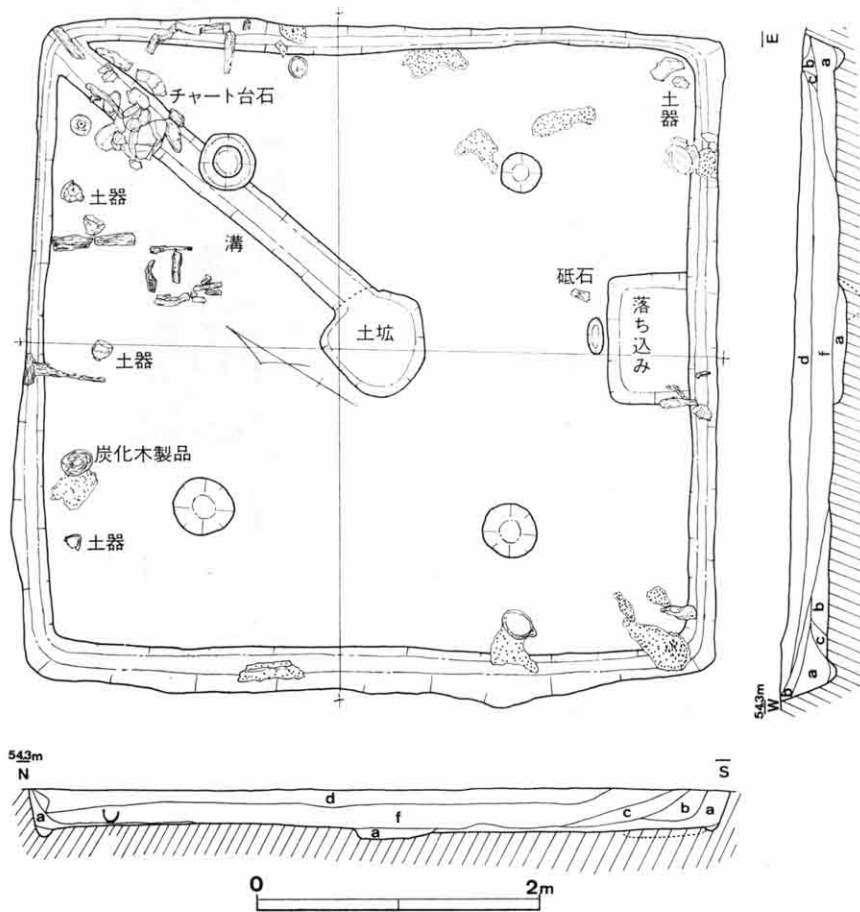


第2図 上人ヶ平遺構概観図

れた溝は、一般にはあまり見られず、その性格が大きな問題となる。仮に排水溝と考えた場合、柱穴が溝の半分を切り込んでいることや周壁溝よりも深く掘り込まれていることから可能性は低くなる。また、住居内の区画を目的と考えた場合、対角線上であることから肯首できない。他の類例を調査する必要があるが、ここでは、溝内上層にチャートの台石があることから、何らかの生産の場に附随した施設であったと考えておきたい。

(2) 古墳時代

○住居跡群…古墳時代の住居跡は、34・35・36btにおいて合計8基確認している。その大半は、3m×4mの長方形プランを持つもので、周壁溝等の点においては大きな変化はない。しかし、36btで検出した竪穴式住居跡(SB3620)は、住居跡の周囲に幅10cm・深さ5cmの溝がめぐっており、他の住居跡には見られない施設である。今後、類例を調査し、正確



第3図 竪穴式住居跡(SB0305)実測図

- a, 黒褐色土(炭) b, 暗茶褐色土 c, 茶褐色土 d, 黄褐色土
 e, 黄褐色粘質土 f, 明茶褐色土

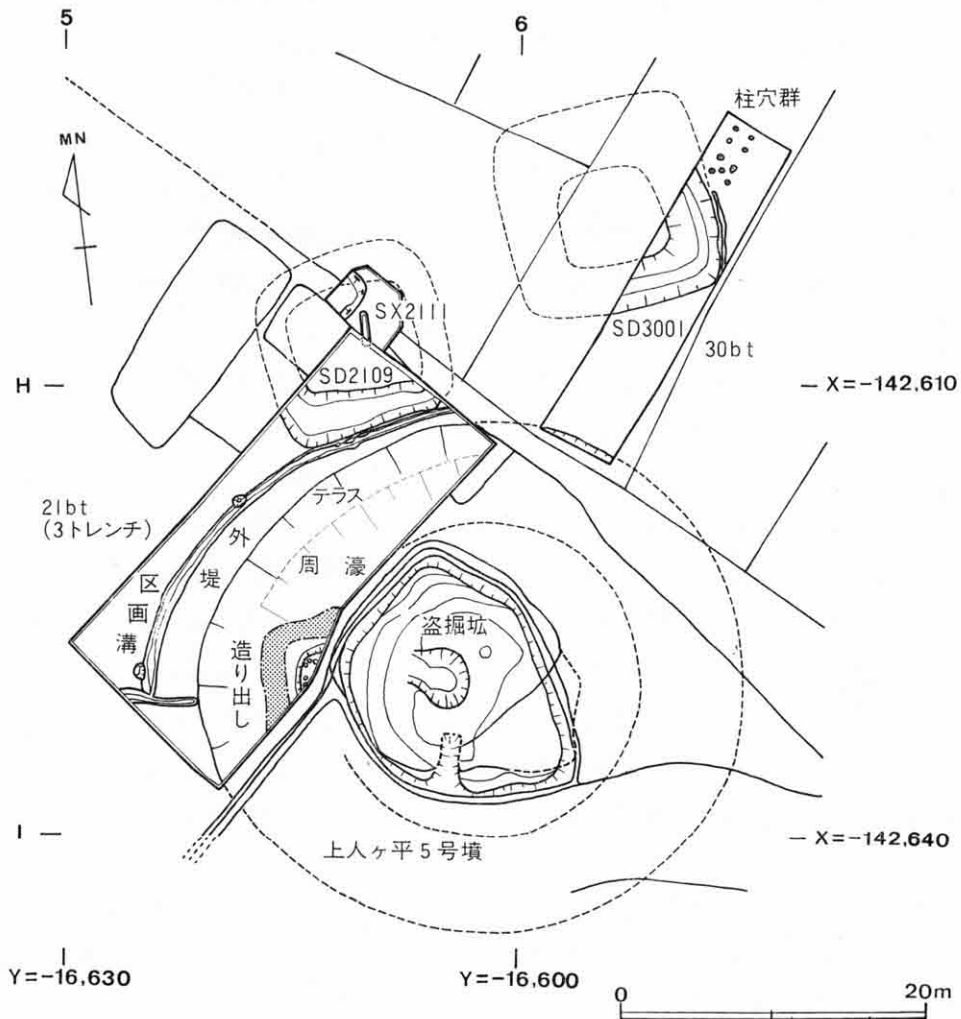
な時期設定と用途についてまとめたい。これらの住居跡群は、尾根の全域に広がりを見せており、布留式併行期に小規模な集落が存在したことがわかる。同時期の遺構は、同丘陵内では、中央尾根の19bt内で合口壺棺墓(第5図4)があり、住居域と墓域が異なった尾根で区別されていたと考えられる。また、本遺跡の北側の谷部には、同時期の自然流路を確認した瓦谷遺跡があり、流路内から木製棺の小口板や木製農工具の未製品等が多量に出土しており、木製品を加工する工房跡があったと考えられているが、今回、確認した住居跡群もそれらと深くかかわっていたと考えられる。

○古墳群…先述したように、古墳群は、上人ヶ平5号墳から3btにかけての主尾根上に築造されている。古墳の種類は、帆立貝式古墳である上人ヶ平5号墳・円形墳と考えられる上人ヶ平1号墳・大小の方形墳の三種である。ここでは、上人ヶ平5号墳とそれに隣接した方形墳SD2109とSD3001について個別に記述し、全体を概観したい。

上人ヶ平5号墳は、昭和13年に梅原末治によって調査され、造り出しの付く円墳であることが確認された。また、山城考古学研究会によって測量調査が実施されたという経過がある。今回の調査は、古墳の北西部分に当たり、外堤・外堤に伴う溝及びテラス・周濠・造り出しを確認した。墳丘は、盗掘坑や耕作等により半壊に近い状況であり、墳丘上には円礫・埴輪片が散乱している。外堤は、一部の調査ではあるが、約35mの直径でめぐると考えられる。外堤自体は削平されており、どのような形態であったかはわからないが、現存幅は2mである。周濠は、外堤内側に平坦なテラスをもち、更に深く掘り込んだ二段掘りになっており、周濠下層全面において倒壊した埴輪片が散乱している状況である。造り出しでは、上部縁辺部に南北3個体、東西2個体で埴輪列を構成している。大半が崩壊しているが、地中に残存する部分から見ると造り出しの角部には、比較的直径の大きい埴輪が樹立されていたと考えられる。隣接した部分から鶏形埴輪の頭部が出土しており、あるいは、この鶏形埴輪が樹立されていたのかもしれない。造り出しの傾斜面下半には、転落した円礫が出土し、原位置を保っているものは僅少ではあるが、その礫群の広がりから造り出しの規模を推定できる。造り出し部分の周濠は、特別に掘り広げられてはおらず、墳丘に沿って正円形を呈している。周濠内からは、鶏形埴輪に代表される形象埴輪や円筒埴輪が出土している。周濠の堆積土上層には、奈良時代の軒丸瓦・平瓦・須恵器・土師器等が出土しており、墳丘・造り出しを除く他の施設は、奈良時代の工房造営に伴い削平や埋め戻しが行われたと考えられる。

方形墳(周溝SD2109・埋葬主体部SX2111)は、一辺10m前後の周溝をもつ。埋葬主体部は、ほぼ完存しており、主軸線は磁北と一致している。棺の周りに白色粘土を確認し、棺内遺物として鉄製剣・ガラス小玉が出土している。これらの遺物を検出した面には、赤色

顔料が塗られており、棺内の状態を復元する際に一つの根拠になる。棺埋納塚の北側には、一辺40cmの副葬品埋納土坑がある。ここからは、須恵器の把手付碗(第5図2)や鉄斧・鉄鎌・鉄鏃・刀子等が出土している。須恵器の碗は、いわゆる、初期(古式)須恵器の範ちゅうに入るもので、他の鉄製品との同伴関係で考えれば、鉄製品の編年の研究上、一級資料と言える。墳丘は、後世の削平を受けておらずほぼ完存しており、また、埋葬主体部も完存に近い状態であることから考えると、いわゆる、高塚ではなく、低墳丘であったと考えられ、削平があったものの、大半は埋められたと考えるべきである。地山と墳丘の境には、黒褐色炭層が1cm前後堆積しており、古墳築造時に周辺を野焼きした跡と考えられ、周溝内にも炭層が堆積している。周溝は、単純に2層に分層でき、下層から埴輪片が多量



第4図 上人ヶ平5号墳・上人ヶ平21, 30番地遺構実測図

に出土し、上層から、5号墳と同じように奈良時代の遺物が出土している。この方形墳を、5号墳との関連で考えた場合、5号墳の外堤外側にめぐる溝は、当初、外堤を区画するための目的であったと予察していたが、方形墳(SD2109)と5号墳の隣接部分の溝は、いずれの古墳の溝も切り込んでおらず、むしろ、5号墳の外堤の幅を狭くするように掘られている。溝からの遺物はないが、これらの状況から考えると、5号墳築造後に方形墳(SD2109)が築造され、隣接した場所を選地したために、双方の聖域を厳守するため、5号墳の外堤をも切り込んで掘られたと解釈できる。しかし、いかなる理由によって隣接した場所に方形墳が築造されたかについては、現段階では不明であるが、周辺に存在すると思しき古墳等の墓道との関連も考えねばならない。なお、周溝内からは、円筒埴輪(須恵質埴輪が50%を占める)や朝顔形埴輪が出土している。

方形墳(SD3001) 5号墳の北側に位置する方形墳で、方形墳の角部のみの検出であり、全体の規模等は知り得ない。墳丘の主軸線は、先述した方形墳(SD2109)と同一であり、規模も近似している可能性が高い。また、墳丘も良好な状態で残存しており、埋葬主体部も完存に近い状態であると考えられる。周溝の土層堆積状況は、下層に須恵質埴輪(第5図1)が入る黒褐色粘土層が堆積している。周溝外側縁辺部には、幅10cmの溝がめぐるが、その用途については不明である。

これらの古墳群は、密集して築造されており、時代的背景から考えると家族墓的性格を有していると考えられる。他の古墳については、割愛したが、全体の傾向を述べると以下のようなになる。上人ヶ平5号墳をもって本格的な造墓行為が開始され、続いて主軸線が、磁北と45°の角度をもつ方形墳が築造され、上述の一辺10m前後の方形墳が築造される。これらの方形墳は、主軸線も異なるが、墳丘規模自体も小さくなっている。築造年代は、須恵器の把手付椀から5世紀中葉となり、二種の方形墳群は、この年代に限りなく近いと考えてよい。大半の方形墳が、5世紀中葉に築造されたと考えられるが、3btで検出した方形墳(SD0304:C4ライン、第2図)の周溝最下層からは、6世紀中葉の須恵器・杯蓋を検出しており、基数は少ないものの6世紀中葉までは規模を縮小しながらも方形墳は築造されたようである。それ以後は、土塚墓に移り変っていったと考えられる。

遺構を中心に概観したが、二・三の図化できた実測図を掲載し、遺物について説明する。なお、今後、遺物整理が進めば、遺構毎の前後関係を更に明確にできると考えている。

弥生土器・鉢(第5図3)は、先述した焼失家屋から出土した土器群の一点である。口径14.3cm・底径5.2cm・器高10cmを測る。底面外面は左下りのヘラ削りで成形し、上半部は、ナデにより調整している。内面は、部分的ではあるがハケ目が観察できる。これらの住居跡内の一括遺物は、器種構成から見た場合、鉢が6個体・甕が2個体であり、鉢が個

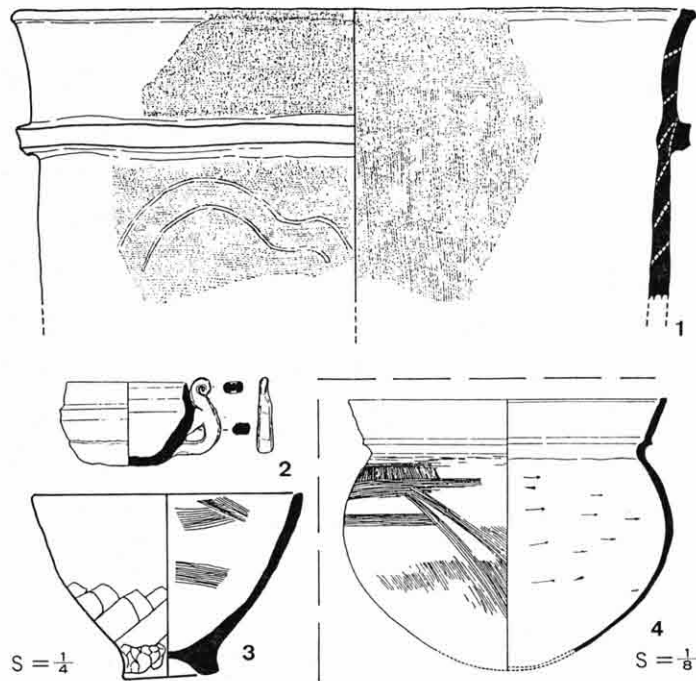
人に帰属する銘々器であったと考えられる。これらの遺物は、畿内第V様式にあっても後半期に比定できる資料であろう。

土師器・甕(第5図4)は、合口壺棺墓(SX1920)の蓋として使用されていたものである。口径は33.6cm・頸径28.8cm・胴部最大径35cm・器高29.2cm(推定値)を測る。外面は、タテハケ・ヨコハケで調整し、内面は、水平方向のヘラケズリにより器壁を薄くしている。これらの土器は、山陰の影響を受けて成立したもので、南山城地域における山陰系土器の動態を考える上で重要な資料である。時期的には、布留式の中でも古い段階のものであろう。なお、壺棺内からは、ガラス小玉が数点出土しており、土器とともに古墳時代前期の墓制の一側面を解明できたと考えられる。

須恵器・把手付碗(第5図2)は、口径6.4cm・胴部最大径7.2cm・底径4.3cm・器高4.4cmを測る。体部内外面とも精緻なロクロナデで仕上げている。底部は、不整方向のヘラ削りの後、ナデで成形し底部中央に「+」形のヘラ記号を線刻している。把手は、厚さ0.8cmの粘土棒を胴部3か所に貼り付けており、最上部を巻き込んでいる。この碗は、いわゆる、初期(古式)須恵器の範ちゅうに入るもので、当地域への須恵器導入の時期を考える上で重要な資料であるばかりでなく、初期須恵器の広がりをも点として押さえられる資料として貴重な発見と

言えよう。

円筒埴輪(第5図1)は、上縁部径36cm・突帯径35.4cm・残存高17cmを測る。外面は、部分的にタテハケが残るが、大半がヨコハケである。また、内面は、上縁部下5cmの範囲をヨコハケ調整で、以下、タテハケである。外面には、「~」形を二重にした線刻がある。この線刻の意義については、判



第5図 出土遺物実測図

1. SD3001 2. SX2111 3. SB0305 4. SX1920

断の根拠がないが、抽象的な表現と考えられる。なお、本埴輪は、古墳周溝(SD 3001)から出土した、須恵質埴輪であり、今後、周溝を拡張した際に同一個体が出土する可能性があり、線刻の意味が明らかにできると考えられる。本遺跡の調査では、多量の埴輪が出土しており、正確な図化が必要であるが、方形墳の年代設定においては、概ね、本資料が表わす年代観と大差はないものと考えられる。

3. ま と め

上人ヶ平遺跡は、現在までに広範囲に試掘坑を設定し、遺跡の性格を把握するために調査を継続しているが、今年度の調査において弥生時代後期の竪穴式住居跡を新たに発見し更に古くさかのぼることが判明した。個々の遺構については、説明し得ないが、ここでは、上人ヶ平遺跡についてのアウトラインを周辺地域との関連で説明したい。

平野部へ最も突出する3btの尾根上で、弥生時代後期の竪穴式住居跡を1基検出したが、この地点の標高は、54～55mを測り、平野部との高低差は15mを測る。また、平野部や周辺の丘陵への眺望がよく、単なる住居跡と考えるよりは、一種の見張りを想定したと考えたい。周辺には、城山遺跡(木津城の下層で土器が発見されている)や椿井大塚山古墳下層遺跡などが現在までに知られており、その立地条件から、高地に位置する遺跡として考えられている。いわゆる、高地性集落の南山城における動態は、宇治市羽戸山遺跡・城陽市森山遺跡・八幡市幣原遺跡・田辺町天神山遺跡等を線で結び、考えられてきてはいるが、本例も含め再考をする必要が出てきたと言える。今回の調査では、1基のみの検出であったが、住居跡が近接地において発見される可能性は残っており、この観点に立った今後の調査に期待せざるを得ない。

弥生時代後期の竪穴式住居跡が廃絶して以降、上人ヶ平遺跡では、引き続き土地利用が行われるが、画期としてとらえた場合、布留式併行期の集落をあげることができる。事実報告でも述べたように、合計8基で構成している集落は、住居跡の切り合いがほとんどないことや、土器の年代観が極端に相違しないこと、そして、中心的な住居跡と考えられるSB3620の存在等から、一時期に成立し、一定の存続をした段階で廃絶したと見てよい。このことは合口壺棺墓(SX1920)や瓦谷遺跡の年代観からも肯首できる。集落の成立した要因は、慎重に論じなければならないが、瓦谷遺跡との関連も考えねばならない。今後、当地を中心に布留式併行期の集落が周辺に広がる可能性は高い。なお、合口壺棺墓は、1基のみ確認したに過ぎないが、墓域と住居域と考えた場合、今後、同じような墓が確認されよう。

布留式併行期までは、大局的に見て居住空間として土地利用がなされたが、5世紀段階の中葉を前後した時期からは、墓地としての性格を持ち始める。まず、上人ヶ平5号墳が

築造され、墳丘規模・外部施設・埴輪の多様性等から考えた場合、在地勢力が最も安定・拡大した時期と見るべきであろう。また、出土した埴輪群の調整技法や形態・大きさは、佐紀・盾列古墳群に類似したものも見られ、それとの関連も考えておかなければならない。特に、造り出し部分の上縁角部から出土した鶏形埴輪は、造り出しの両角部に樹立されていたと考えられ、一考に値する。5号墳築造以降は、須恵質埴輪を持つ方形墳が築造される。低墳丘であることや埋葬主体部が木棺直葬であること等が一つの特徴と言える。近年、このような古墳の調査例が増加しており、墳丘に表現された社会的背景を考えねばならない。これらの古墳をグローバルに考えた場合、当地の周辺は横穴式石室墳不採用地域という解釈ができる。南山城においては、城陽市久津川古墳群等が該当するが、いかなる理由で石室墳が存在しないのか、非常に興味深い現象である。

以上を弥生～古墳時代の概観としたいが、奈良時代に入ると上人ヶ平遺跡に平城京との関連で掘立柱建物跡等の建造物が造り始められる。南側に隣接した市坂瓦窯は、平城宮に瓦を供給しており、瓦生産に伴う建物跡であることが判明している。奈良時代の遺物包含層は、ほぼ遺跡内全域で確認しており、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・須恵器・土師器等が多量に出土している。また、土坑内からの出土も多く、単に瓦生産に附随する建物ではなく、倉庫と一体化した集落が存在していたと考えてもよい状況にある。近年、瓦窯及び瓦窯に伴う工房跡の調査が進展し、実態が少しずつ明確にされてきてはいるが、これらの施設とともに集落・倉庫が明らかになった例は極めて少なく、当時の生産体制を考える上で重要な発見と言える。上人ヶ平遺跡の奈良時代の動態は、需要(平城宮)と供給(市坂瓦窯・上人ヶ平遺跡)の関連を十分考慮し、慎重に検討していかねばならない。今後、それらの関係機関が密に資料提供を行い、討議する必要があるだろう。

4. おわりに

上人ヶ平遺跡の調査は、過去3年間に及んでいる。その間、資料の蓄積は膨大なものとなるとともに、その資料的価値は、南山城の中においても非常に重要なものになっている。関西文化・学術研究都市関係の調査によって明らかにできた考古資料は、対象地域のみならず広い地域の歴史を考える上で貴重な資料になると確信している。

最後に、現地調査・整理作業に従事して頂いた多くの方々に感謝の意を表わすとともに、調査進行の上で御協力を賜った地元の方々、住宅・都市整備公団、木津町教育委員会の方がたに謝意を申し述べたい。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第3係調査員)

昭和62年度発掘調査略報

13. 新ヶ尾東古墳群（8・9・10号墳）

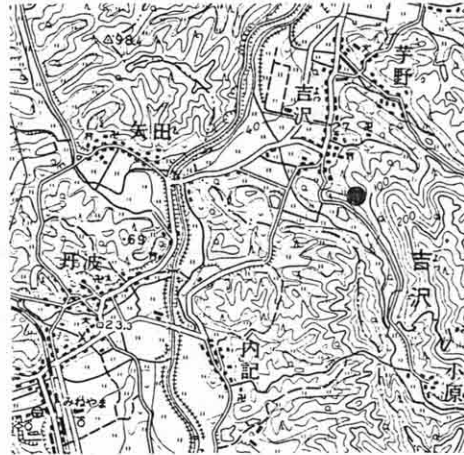
所在地 竹野郡弥栄町吉沢小字半坂・坂場
 調査期間 昭和62年10月6日～昭和63年1月25日
 調査面積 約700m²

はじめに この調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」に係る幹線道路の建設に先がけ実施したものである。

新ヶ尾東古墳群は、竹野川の一支流である入山川右岸の丘陵上に立地しており、分布調査等により11基の古墳が確認されている。調査の対象となったのは、丘陵高位側に分布する8号墳～10号墳までの3基である。

調査概要 8号墳 墳丘は、南西側1/2が削られていたが、直径約10m・高さ2mの円墳である。東側には、9号墳と区画する溝も設けられている。埋葬施設は、墳丘中央部ではほぼ同位置に重なり合った木棺墓2か所と、墓壇南端で切り合う火葬墓1か所を検出した。火葬墓からは、木櫃に納められていたと思われる火葬骨片と釘6本が出土した。第1主体部は、盛土から墓壇を穿ち、第2主体部は地山削平面より穿つ。いずれもその主軸は尾根に直交する。第1主体部検出面より少量の須恵器器台片、臙片が出土した。両主体部とも棺内には遺物は認められなかった。頭位方向は不明である。

9号墳 墳丘は、非常によく整った直径11mの円墳で、8号墳からの高さ1.8mを測る。東側には、尾根と区画する溝が設けられている。埋葬施設は、3か所の木棺墓を検出した。中央に位置する第1主体部は、その主軸を尾根に直交し、その両側で検出したものは（西側第2，東側第3主体部）、南北方向を示す。いずれも地山削平面より墓壇を穿つが、第1・2主体部は二段掘形、第3主体部は素掘りの墓壇となっていた。遺物は、第1主体部棺内南端より須恵器杯



調査地位置図 (1/50,000)

身、杯蓋が重ねられ1セット、墓坑中央西端より鉄鏃1が出土した。第3主体部では、南端で須恵器転用枕として杯身、杯蓋が伏せ並べられた状態で出土し、北端からは刀子1も出土した。第2主体部は遺物を有していなかった。出土状況から頭位は南枕と考える。

10号墳 直径11m・高さ2mを測る円墳で、東側には尾根と区画する溝を設ける。埋葬施設は、北開口の無袖式竪穴系横口式石室である。玄室内には、棺台として使用された石列2列を確認し、棺台周辺では、玉類・鉄器類が出土した。大半の遺物は、閉塞石付近にかたづけられた状態で出土している。石室は、玄室側壁が3～4段積み上げ、最上・下段のみ比較的大きな石材を用い、その間は大小さまざまな石材を用いている。奥壁基底石は2石で構成されるが、1石しか残存せず最下段のみ確認した。横口部分は小さな石材を2～3段積み上げるが、最下段の石材と横口部中央床面とが約10cm差があり、浅い墓道状に凹み北上がりの傾斜をもつ。横口部と玄室とは、床面が約30cmの段差により区画される。石室掘形も、横口部の段までのみ掘られ、横口部側壁の掘形はなく削り出し地山面に直接石材を置き盛土している。閉塞石は、横口部の段より内側1mの所に約6段の石材を積み上げている。閉塞石は、玄室側から見ると石垣様にていねいに積まれており、最下段の2石のみ面を整えているが、3石目より上方はやや外反する。最下段の2石は、横口部の段より比較的大きな平らな石を敷きつめ、階段状に一段設け玄室内に入る構造をもつ。また上方3石は、追葬時に新たに積まれたものであり、2時期にわたり使用されている。石材の積み方には規則性があり、閉塞石下段の2石、玄室内最下段の石材、横口部側壁最下段が、ほぼ同レベルに合わせられている。横口部には天井石はなく、玄室天井石外側を覆う形で閉塞されていたものと考えられる。

まとめ 新ヶ尾東古墳群は、出土した遺物から、8・9号墳は6世紀中頃、10号墳は6世紀後半に築造されたものと考えられる。同一丘陵上に3基の古墳が築造され、木棺直葬墳と石室墳が共存し、石室は竪穴系横口式石室という特色を有する。時期差は認められるものの木棺直葬墳と石室墳という埋葬施設の差を被葬者の差と見ることができ、9・10号墳で見た場合、頭位方向が南枕であるという共通点がうかがえる。京都府北部では、前期・中期の竪穴系横口式石室は4例知られているが、本年度調査した遠所1号墳も本古墳と形態が似ており、同時期のものであり、埋文情報26号を参照されたい。(増田孝彦)

古墳	主体部	規模
8号墳	第1主体部	幅不明、長不明、深0.3m
	第2主体部	2.9m×4.8m、深1.0m
9号墳	第1主体部	3.1m×1.1m、深0.3m
	第2主体部	2.3m×1.2m 深0.6m
	第3主体部	2.2m×0.8m 深0.2m

古墳	規模
10号墳	石室全長5.1m、玄室長3.4m、 玄室幅1.3～1.4m、高1.2m 横口幅1.2～1.3m、高0.6m

主体部規模一覧表

14. 普甲古墳群・稲荷古墳群

所在地 竹野郡弥栄町井辺小字普甲・小普甲
 調査期間 昭和62年6月1日～12月9日
 調査面積 約3,800m²

はじめに 今回の調査は、農林水産省近畿農政局が計画、推進している「丹後国営農地開発事業」の井辺団地造成工事に伴い行ったものである。普甲・稲荷の両古墳群は、竹野川中流域左岸の標高31～58mの丘陵上に位置しており、分布調査等によってそれぞれ13基・19基の古墳が確認されている。このうち造成に係る普甲1～7号墳、稲荷15・17～19号墳の11基の古墳の発掘調査を行った。

調査概要 以下各古墳ごとに、概要を記す。

(普甲古墳群) 1～3号墳は、尾根主軸に直交する溝で区画されている。1号墳は、尾根の基部に位置し、6基の埋葬施設と2基の性格不明の土塚を検出した。第2主体部からは、滑石製玉類が出土した。2号墳は、長辺6m×短辺5m程度の方形を呈する。埋葬施設は1基で、箱形木棺を使用していたと推定される。3号墳は、ほぼ8m四方の方形を呈するが、東側は不整形でありいびつな形となっている。4基の埋葬施設を検出した。第4主体部からは、鉄剣・鉄斧・鉈が出土した。4～7号墳は、傾斜が急な部分に位置しており、丘陵斜面を階段状に削り平坦面を設け、それぞれの平坦面に1基ずつ埋葬施設を検出した。4号墳は、長辺10m×短辺7m程度の台形を呈する平坦面を設ける。主体部は、地山を2段に掘り込むもので長さ5.8mを測り、箱形木棺を使用していたと推定される。遺物は、土師器(壺・小型丸底壺・高杯)、玉類が出土した。5号墳は、長辺8m×短辺4m程度の台形を呈する平坦面を設ける。主体部は、地山を2段に掘り込むもので、長さ3.9mを測る。6号墳は、長辺10m×短辺9m程度の台形を呈する平坦面を設ける。主体部は、長さ4.3mを測る墓壇に割竹形木棺を使用していたと推定される。遺物は、鉄鎌・鉄剣・堅櫛が出土した。7号墳は、長辺10m×



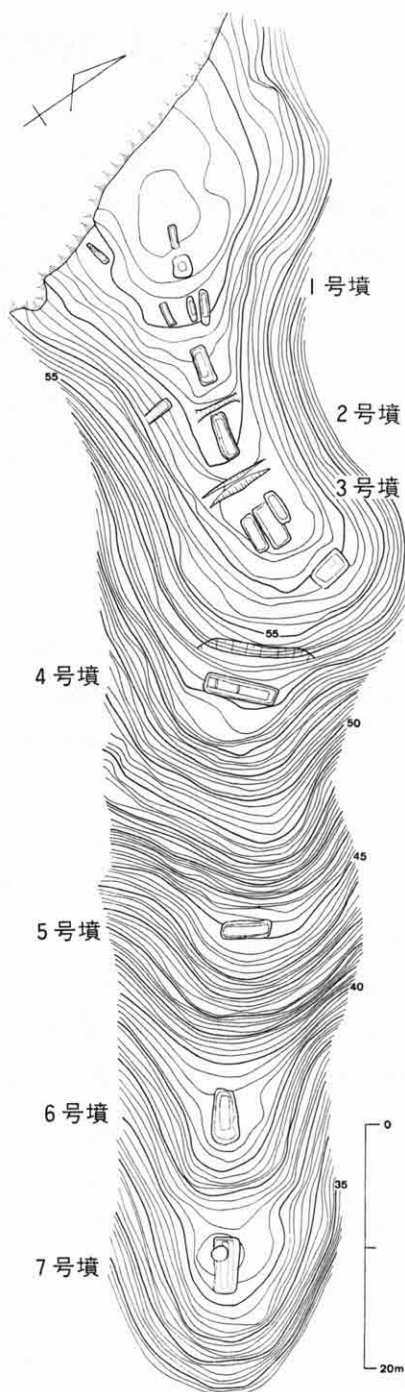
第1図 調査地位置図 (1/50,000)

短辺9m程度の台形を呈する平坦面を設ける。主体部は、長さ4.7mを測る墓壇に割竹形木棺を使用していたと推定される。遺物は、鉄鏃・直刀が出土した。

(稻荷古墳群)15号墳は、尾根に直交する溝によって区画されており、約8m四方の方形を呈する。主体部は長さ約4.2mを測り、割竹形木棺を使用していたと考えられる。遺物は、直刀が出土した。17・18号墳は、径8m程度の円墳であるが、いずれも後世の削平を受けており主体部は残存していない。19号墳は、18号墳に接するテラス状の地形を呈し、小規模な土坑墓をもつ。

まとめ 今回の両古墳群の調査では、木棺直葬墳11基およびこれに伴う18基の埋葬施設を確認した。築造時期については、普甲4号墳出土の土師器、そのほかの遺物から5世紀前半を中心とするものと考えられる。丹後地域においては、近年の分布調査等によって、丘陵上に展開する今回のような小規模な木棺直葬墳の把握が飛躍的に進んでいる。しかし、その実態・時期等については依然不明な部分が多い。また、隣接する丹波・但馬等の地域においても近年、同様な古墳群の調査例が増加しつつある。このような中で今回の調査は、小規模古墳のあり方を考える上で重要な資料を提供したと言える。

(森 正)



第2図 普甲古墳群地形測量図

15. 泉源寺遺跡

所在地 舞鶴市泉源寺766
 調査期間 昭和62年10月9日～12月18日
 調査面積 約1,220m²

はじめに 泉源寺遺跡は、舞鶴市教育委員会が昭和60年度に行った分布調査により確認された、奈良時代～平安時代にかけての遺跡である。JR小浜線東舞鶴駅から、北東へ約2.3kmのところの、愛宕山から南東方向に派生する丘陵裾部の高台に位置する。

今年度、京都府教育委員会は、府立東舞鶴高等学校の造成工事を計画した。その予定地が当遺跡にかかるため、発掘調査を当調査研究センターに依頼し、今回の調査となった。

今回の調査地は、丹後と若狭を結ぶ交通の要所にあり、泉源寺遺跡の東端にあたる。北にJR小浜線、南に東舞鶴高等学校、西は御霊神社に囲まれたところである。この付近は、愛宕山と吉野の山からの谷筋にあたり、扇状地形となっている。通称「百姓谷」と呼ばれている。このあたり一帯は、鎌倉時代には「志楽荘」と言われ、奈良・西大寺の荘園の一つとして知られているところである。調査地の北西約200mのところに「泉源寺跡」があり、西大寺の末寺・泉源寺があったと推定されている。



第1図 調査地位置図

調査概要 調査は、遺跡の有無や広がりを確認するための試掘調査から始めた。その結果、特に遺構の集中したところを一部拡張して、規模・性格・時期などの確認を行った。

試掘調査の結果、調査地西側では、耕土下すぐに岩盤となり、古墳・柱穴・土壇等を発見した。東側では深さ2m程掘削したが岩盤は見られず、山手から流出した砂礫が厚く堆積していた。これらのことから調査地付近の旧地形は、調査地北東の城山の裾部から南方に大きな谷がのび、その谷に張り出すように高台が広がっ

ていた。今回検出した遺構は、この高台に築かれたものである。

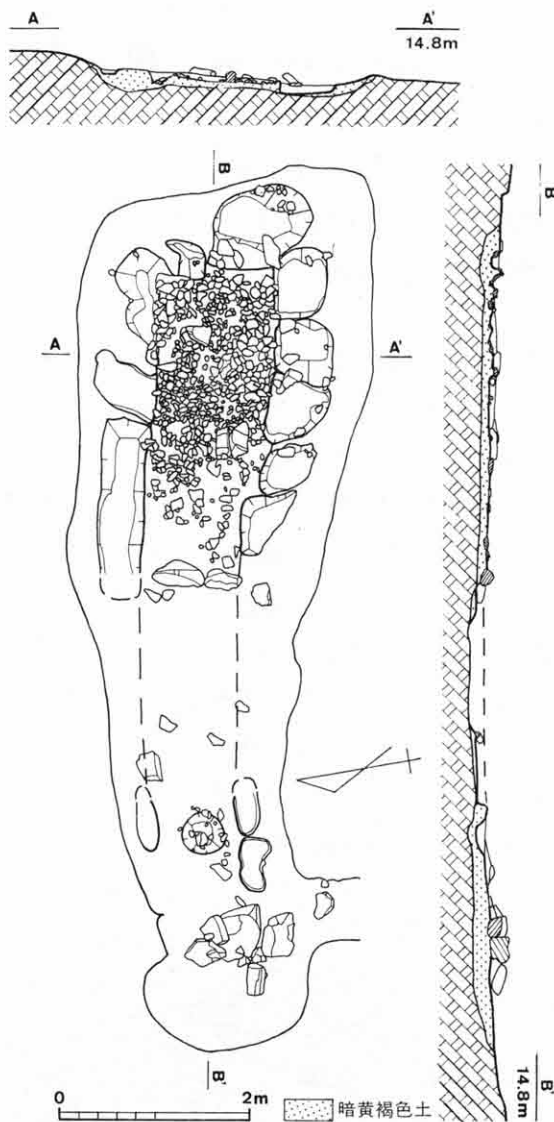
検出遺構 古墳1基（泉源寺2号墳）、掘立柱建物跡1棟、柵列1列、土坑18基を検出した。

泉源寺2号墳 今回の調査で発見した古墳である。横穴式石室を主体部とする古墳であるが、後世の田畑の耕作により石はすべて抜かれていた。抜き取り穴から片袖式であることが判明したが、墳形は不明であった。玄室と羨道部から須恵器（杯身・杯蓋・高杯など）が出土した。その形態から6世紀後半の古墳であることがわかった。また、鉄器（刀・鏃）も出土している。羨門部には閉塞石が残っており、その付近からは祭祀的要素の濃い遺物がまぎらまぎら出土している。

掘立柱建物跡・柵列 調査地西端から検出した。建物跡は、南北に3間、東西は2間以上であることを確認した。柱穴内から土器片が出土しており、鎌倉～室町時代の建物跡であることが判明した。また、建物跡に平行して、南北方向の柵列を検出した。掘立柱建物跡とはほぼ同時期と思われる。

まとめ 大きく2つの成果があった。1つは、片袖式の横穴式石室を主体部とする泉源寺2号墳の発見である。志楽川沿いにおいては古墳の数が特に少なく、今回のように後世の削平を受けた古墳が、現在もなお遺存している可能性がある。もう1つは、中世の掘立柱建物跡・柵列等の検出である。今回は、一角を調査したにすぎず、これら中世の遺構が奈良・西大寺の荘園の1つである「志楽荘」と関連するかは、今後検討していきたい。

（岡崎 研一）



第2図 泉源寺2号墳実測図

16. シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群

所在地 舞鶴市字志高
 調査期間 昭和62年9月21日～昭和63年1月21日
 調査面積 約240m²

はじめに 今回の調査は、府道舞鶴福知山線の拡幅工事に伴うものである。シゲツ窯跡については、従来から窯体が露出しておりその存在が知られていた。また、シゲツ墳墓群については遺物出土地であるシゲツ遺跡として知られていた。

調査概要 調査は、窯跡関連遺構の存在が予想される地区(A地区)の8か所と、墳墓関係の遺構の存在が予想される地区(B地区)の4か所で行った。

A地区では須恵器窯1基(1号窯)と、それに伴うと考えられる焼土塚および工房跡に関連すると考えられる柱穴群を検出した。1号窯は、谷あい部に営まれた現存長7.5m・最大幅1.7m・現存高0.7m・傾斜角26°を測る須恵器窯である。すでに燃焼室を失っており、本来は、全長10m近くを測るものであったと考えられる。燃焼室に近い焼成室部分では床面の下に須恵器片と窯滓が堆積した土塚が存在した。最終焼成床面上から7世紀後半の須恵器(杯身・杯蓋・椀・甕等)が出土した。焼土塚は、1号窯に近接した斜面上で検出した。直径2m以上・深さ約50cmを測り、上層には炭・灰を含んだ土が、下層には窯滓を含んだ焼土が堆積していた。1号窯とはほぼ同時期の須恵器が出土した。

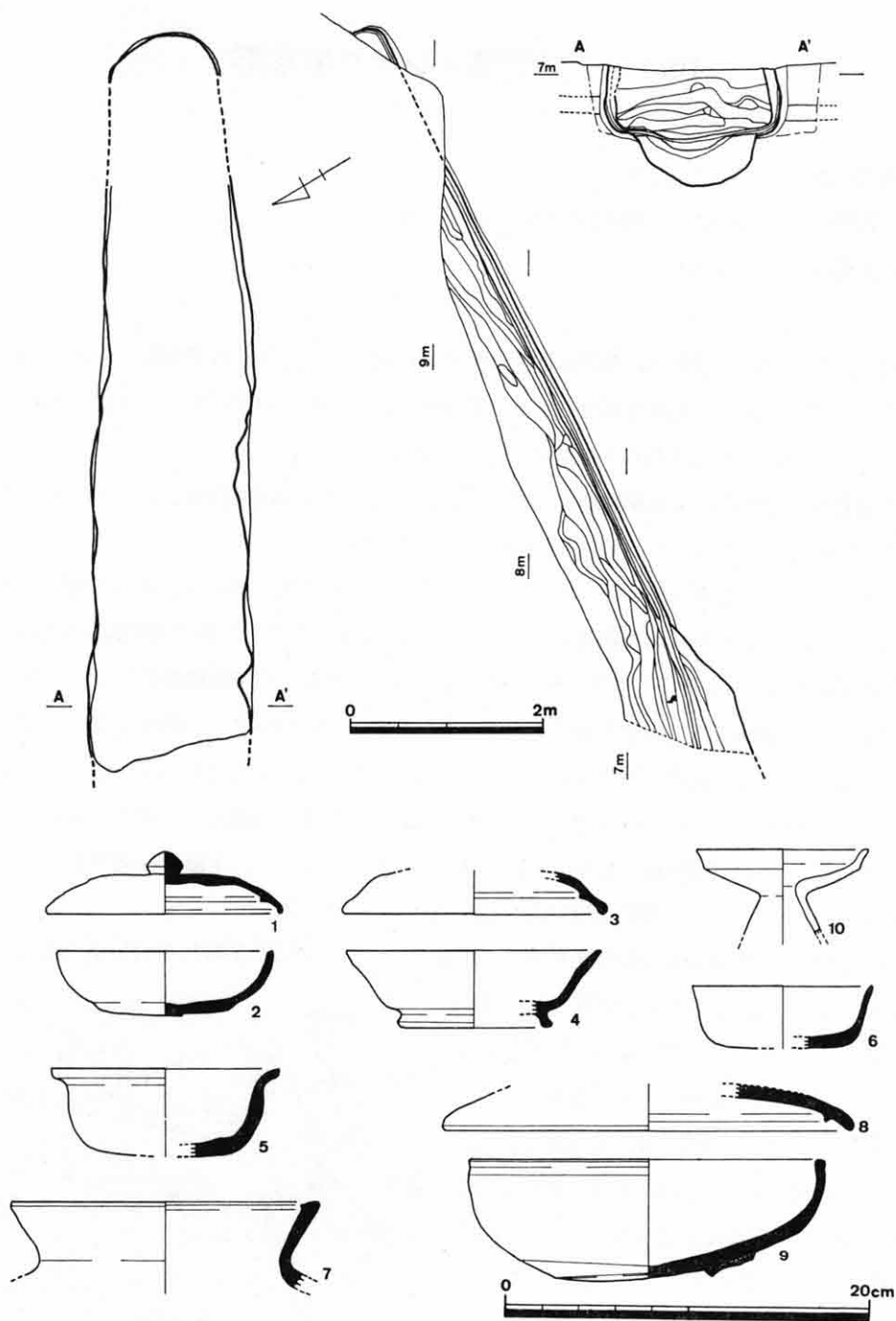
B地区は北にのびる緩やかな尾根線上に位置する。ここでは弥生時代後期初頭の墓塚を検出した。また、2か所の平坦面から古墳時代前期の遺物が出土した。これらは本来階段状地形を呈する台状墓であったと考えられる。

まとめ 今回の調査では、由良川下流域における7世紀後半の須恵器生産の様相を解明する資料を得ることができた。また、弥生時代から古墳時代前期にかけて丹後・但馬地域を中心に分布する低丘陵上の台状墓群がこの地域にも存在することが判明した。

(肥後 弘幸)



第1図 調査地位置図



第2図 シゲツ1号窯実測図及びシゲツ窯跡・シゲツ遺跡出土遺物

1～9：須恵器， 10：土師器

1：焼土埴， 2・3・4・8・9：1号窯， 5・6・7：1号窯下層土埴， 10：シゲツ遺跡（舞鶴市保管）

17. 小西町田遺跡

所在地 綾部市小西町上町田5番地ほか
 調査期間 昭和62年5月8日～昭和63年1月13日
 調査面積 約5,000m²

はじめに 今回の発掘調査は、近畿自動車道舞鶴線の建設に先立ち実施したものである。小西町田遺跡は、由良川に注ぐ小河川のひとつである犀川の西岸に位置している。犀川流域には、中丹地域では最古の前期古墳として知られている成山古墳群や、導入期の横穴式石室墳とみられる高谷3号墳がある。また、由良川中流域から犀川流域にかけての沖積地に臨む以久田野地上には、丹波地域最大の群集墳である以久田野古墳群が広がっている。これらの点から、犀川流域では早くから開発が進んでいたものと考えられている。

調査は、試掘調査の結果を考慮して、特に遺物や遺構の密集した状態にあった東部地区と西部地区との2か所について実施した。

東部地区 水田として利用されてきた地区である。地表下50cm程度のところで、弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての集落跡を検出した。永年に渡って削平を受けてきているらしく、特に南側での遺構の状態は良好ではなかった。検出した遺構には、溝状遺構や土壇・多数の柱穴がある。溝状遺構のうち、調査区の西から南へ流れる溝SD25が幅1.5m・深さ0.5m程度と比較的明確な溝である。一部を検出しただけであり、確証はないが、居住区を画する溝状遺構かとも考えられる。竪穴式住居跡は検出できなかったものの、溝SD25の北側で掘立柱建物跡1棟を検出した。この集落の中心は、調査地の北側にあるものと思われる。土壇には不定形なものが多い。これらのなかで、土壇SK08は大量の弥生土器が投棄されていた遺構である。器種としては、甃・壺・高杯・器台などがあり、



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

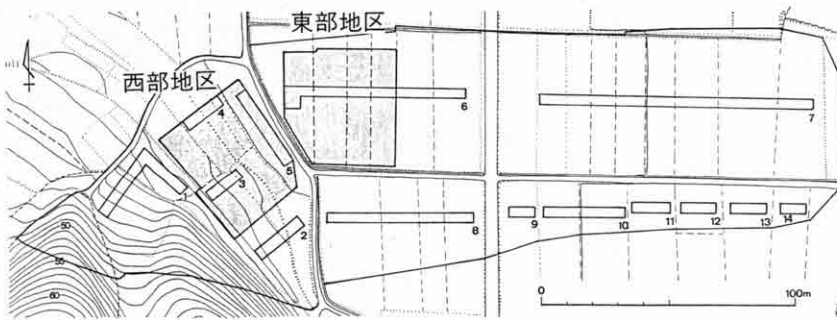
1. 小西町田遺跡 2. 成山古墳群 3. 高谷古墳群
4. 以久田野古墳群 5. 私市円山古墳

一括投棄された可能性が高い。甕の制作技法を見ると、そのほとんどに畿内弥生時代後期を特徴づける「タタキ技法」が用いられている。他の遺構については、整理途上ではあるものの、やはりタタキ技法によるものが数多く認められる。由良川中流域の綾部・福知山地域では、タタキ技法は希薄で、丹波山地南側の園部町曾我谷遺跡が伝播の北限となっていた。タタキ技法の伝播が丹波山地を越えた小西町田遺跡で認められたことは、当遺跡が少なくとも弥生時代末期には畿内との関係において強い類縁関係にあったといえよう。あるいは、畿内勢力の中丹地域進出時における拠点であったことも想定できよう。このことは、当遺跡の背後に当地域最古の古墳群である成山古墳群が造営されていることから類推することができよう。小西町田遺跡と成山古墳群とは、おそらく「村と墓」という関係なのであろう。

西部地区 山麓の緩斜面で、茶畑や畑地として利用されてきた地区である。この調査区では多くの柱穴を検出しており、これらを整理してゆくと10数棟の掘立柱建物が建つものと考えられる。調査地内からは、9世紀前後を中心とする時期の須恵器や土師器が大量に出土した。特に注目されるのは、50点余り出土した緑釉陶器である。椀や皿の破片が多く、完形に近い耳皿も1点みられた。他にも灰釉陶器や青磁・白磁などの破片も出土している。特殊な遺物としては、硯(円面硯・風字硯・転用硯)や墨書土器が数点確認できている。出土遺物の年代から考えると、少なくとも400年程度なんらかの建物が、建て続けられていたものと思われる。また、遺物の様相からすれば、この建物は、官衙的な施設であった可能性が高い。しかし、これらの建物跡の性格づけについては、検討が必要である。

おわりに 小西町田遺跡では、大きく分けて2時期の遺構を検出することができた。今後の整理作業の進展につれて、この地域における弥生時代から古墳時代への転換期のような、文献には現れない古代の官衙的施設のようなすが明らかになってくるものと思われる。

(三好博喜)

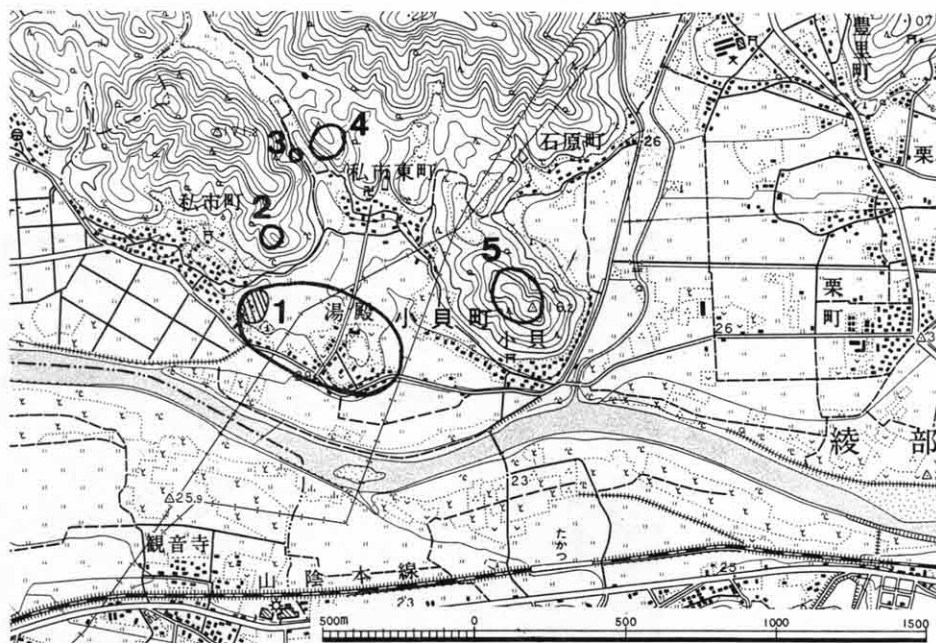


第2図 トレンチ配置図

18. 小 貝 遺 跡

所在地 綾部市私市町・小貝町
 調査期間 昭和62年9月1日～昭和63年1月13日
 調査面積 約1,400m²

はじめに 本調査は、近畿自動車道舞鶴線の建設工事に先立って実施したものである。この小貝遺跡は、西流する由良川の右岸で、北側の山間部から平野部にかけて舌状に張り出した台地上縁辺部に広がる(第1図)。今回の調査地は、私市町と小貝町湯殿との間の丘陵上で、ちょうど丘陵平坦地から斜面地にさしかかる地点に当たっている(同図)。昭和51年度に綾部市教育委員会が古墳時代の須恵器を発見し、同年の京都府教育委員会による発掘調査でも古墳時代から近代に至る資料が得られた。それ以後も、確実に遺跡の存在するところとして知られてきた。しかし一方で、田地のほ場整備を中心とする土地の変容が甚だしい所でもある。今回の調査に当たっても、遺構・遺物の良好な状態での検出はあまり期待できないという懸念があった。しかしながら、弥生時代から鎌倉時代に至る遺構とこれ

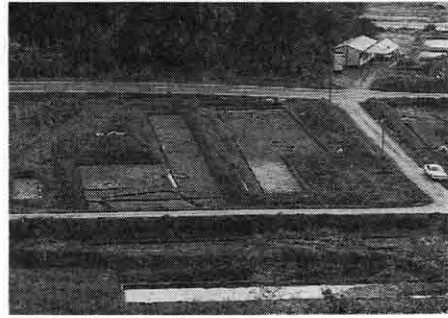


第1図 調査地周辺遺跡分布図

1. 小貝遺跡 2. 山古墳 3. 私市経塚 4. 馬場池東方遺跡 5. 小貝城跡

らに伴う多種多様な遺物が出土し、予想を上回る調査成果を上げることができた。

調査経過 建設予定道路幅に沿う南北に細長いトレンチを中心に、合計11本のトレンチを設定し、重機による耕作土の掘削から始めた。遺構を検出し得たのはA～Cの3トレンチのみで、他のか所では耕土・床土直下で粗砂礫質の地山が表われ、遺構は



第2図 調査地全景
(円山古墳から)

残遺せず遺物も僅少であった。A～Cトレンチ内の遺構は、耕土・床土およびその下層の暗赤褐色粘土を除去した地表下およそ50～60cmで認められた。人力による精査の末、Aトレンチでは多数の柱穴痕(弥生～平安時代)を、Bトレンチでは土塚墓2基(弥生時代後期)・掘立柱建物跡1棟(7世紀以前)・集石遺構2基・柵列などを、Cトレンチでは、方形周溝墓1基(弥生時代後期)をそれぞれ検出した。掘削の過程で、弥生土器片・石器類・土師器・須恵器・瓦器などの遺物を取り上げた。各遺構の写真撮影・平面実測、周辺の地形測量を入念に行い、最終的に航空撮影を行った後、すべての作業を終了した(第2図)。

遺構と遺物 検出遺構のうち、主なものについて述べると、まずBトレンチ南端から出た2基の土塚墓がある。不整形な楕円を呈し、直径は1.5m×1.1mと1.2m×1mで深さはともに約30cmを測る。切り合い関係はないが、隣接している。こぶし大のチャート礫が数点ずつ包含され、2基のうちの小さな方からは弥生土器片(壺)が出土している。

集石遺構は2基で、Bトレンチのほぼ中央部で検出された(第3図)。2基とも直径1.2～1.3mの円形で、深さは約30cmである。中央に幅約40cmの扁平な割石を据え、その周辺にぎっしりとこぶし大の円礫が詰められている。こうした遺構は中世の墓とも考えられるが、焼土・火葬骨はなく、遺物も時期を決定し得るものがないことから断定できない。中世墓よりむしろ、東隣に並ぶ方形の比較的大きな柱穴列とセットで



第3図 集石遺構・柱穴列 (Bトレンチ北から)

考え、門柱の前面に設けられた何らかの施設になる可能性もある。瓦器碗細片が柱穴内から出土しており、鎌倉時代以降に造られたものであろう。

掘立柱建物跡は、集石遺構の南側にある。直径30～50cmの円い柱穴痕が、東西2間・南北3間の建物を構成する。柱間距離は、東西2.1m・南北1.6～1.7mの等間隔である。建物の主軸は、ほぼ南北に沿う。柱穴内には、弥生土器片・土師器片が混在しているが、8世紀にまで下る遺物は見当たらない。

Cトレンチ北端で、方形周溝墓を1基検出している(第4図)。全体に大きく削平を受け、残存状態は悪い。長軸(東西)約9.5m、短軸(南北)約7.7mを測る。周溝は北・東の辺の残りがよく、深さ約40～50cm・幅約60～80cmである。埋土は暗茶褐色粘土で、中からの遺物は少なかった。中でも北辺中央で比較のまとまって弥生土器の壺(第V様式)が出土した。主体部は、中央から東側に少しずれて確認された。東西方向に沿って長さ1.5m・幅70cm・深さ5cmを測る。著しく削平を受け、本来は盛られていたであろう封土もまったく残存しない。なお、Aトレンチでは弥生時代後期・平安時代の柱穴痕を多数検出した。タタキ痕をもつ弥生時代後期の甕や、糸切りの底部を有する須恵器杯などが出土している。

まとめ 今回の調査の結果、主にA・B・Cトレンチから多くの遺構・遺物が検出された。Aトレンチでは弥生時代後期と平安時代の柱穴群を、Bトレンチでは土塚墓・集石遺構・掘立柱建物跡などを、Cトレンチでは柱穴群・方形周溝墓などをそれぞれ内容とする。

当遺跡があるこの台地上は、弥生時代から鎌倉時代にかけて、各時代の人々の極めて身近かな生活領域であった。その利用形態はさまざまで、定住生活を営む集落として、死者を葬う墓域として、あるいは門を構えて何らかの領域を画する空間として活用された。由良川の川岸近くの低湿地よりもはるかに、当地は集落などの立地に適していると考える。

ほ場整備された当地でも、遺跡の残存度は場所により様々である。今後も台地全体における遺跡の広がりを捉えていきたい。

(黒坪一樹・品田俊治)



第4図 方形周溝墓(Cトレンチ東から)

19. 蒲 生 遺 跡

所在地 船井郡丹波町字豊田
 調査期間 昭和62年12月14日～昭和63年2月4日
 調査面積 約600m²

はじめに 今回の調査は、京都府立須知高校の校舎建築工事に先立ち、京都府教育委員会の依頼を受けて行ったものである。当遺跡は、これまで昭和58年と昭和61年の2度にわたり調査が行われている。第1次調査では、弥生時代中期の竪穴式住居跡・土塚などが検出されている。第2次調査では、古墳時代後期の土塚・溝などが検出されている。今回の調査地は、前回調査地の東に隣接する地区に当たるため、古墳時代関連遺構の確認および、さらに遺跡の性格を明らかにすることを目的として行った。

調査概要 調査は、遺構面までの深さが前回の調査によってごく浅いことが予想されたため、旧校舎のコンクリート基礎を取りはずさずに行う方針にした。重機により旧校舎解体時の廃土を除去した後、人力による掘削を開始した。その結果、調査区のうち的大部分が、2度にわたる校舎の建築によって地山面まで削平を受けていることが分かった。さらに、コンクリートの基礎が縦横に残るといった状況であった。わずかに調査地西側の部分でピットを検出した。遺物についても、須恵器片・土師器片数点が出土したのみであり、その時期を特定することはできない。

まとめ 今回の調査では、顕著な遺構・遺物は、確認されなかった。これは、前回の調査地と同様に校舎建築時の削平によるところが大きいと考えられる。今後、周辺の調査が進むことにより当遺跡の時期・性格等が、より明らかになるであろう。

(森 正)



調査地位置図 (1/50,000)

20. 長岡京跡右京第281次 (7ANNKN-3)

所在地 長岡京市友岡1丁目1-1 (府立乙訓高等学校)
調査期間 昭和62年10月9日～11月6日
調査面積 約100m²

はじめに この調査は、京都府立乙訓高等学校における体育施設の建設工事に伴う事前調査である。調査地は、長岡京の条坊復元図によれば、右京七条二坊十六町にあたり、乙訓高等学校の西側段丘とは3m前後の比高差がある。これは、学校が建築される以前の、競馬場造成時に、段丘斜面を削平し東方に盛土したことによる(旧地形図からわかる)。

乙訓高等学校の右京第79次調査では、競馬場のコンクリート溝と土壇が検出されただけであった。東側の右京第193次調査では、3m以上の盛土層の下から造成前の土壇・水田畦畔、その下層から谷地形(自然流路)が検出されている。

調査概要 グラウンド西北端の一段高くなったバスケット・バレーコートに、4m×10mのトレンチを設定して掘削を開始した。ここでは、グラウンド整地層・攪乱層の下から、黄色・黄褐色粘質土、砂礫層が表れた。この層を掘り込んだ4本の溝が検出された。排水溝・コンクリート溝・素掘り溝(排水溝下層)である。これらに伴う遺物は出土しないが、いずれも段丘削平後のものと推測される。黄褐色土は、堅く締まり、部分的に礫を含む「地山」と推定される。この調査では、以上のとおり顕著な遺構・遺物は検出されず段丘の削平が判明した。

まとめ 今回の調査では、右京第79次調査と同様なコンクリート溝・素掘り溝が検出されたのみで、段丘面の削平により、長岡京の条坊等は検出されなかった。乙訓高等学校の西半分は造成による削平が著しいが、東側では遺構の検出が期待される。(石尾政信)



調査地位位置図 (1/50,000)

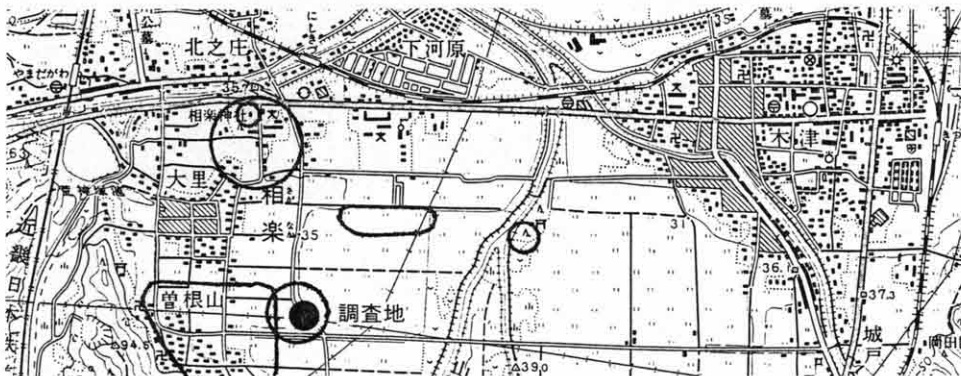
21. 八ヶ坪遺跡第3次

所在地 相楽郡木津町大字相楽小字八ヶ坪
調査期間 昭和62年11月9日～12月23日
調査面積 約400m²

はじめに この調査は、京都府木津土木事務所が計画・施工する一般地方道木津平城線拡幅工事に伴う事前調査である。本遺跡は、木津川の南方に広がる沖積地の西端に位置し、周辺には、散布地としての曾根山遺跡・鶴ノ町遺跡が所在する。また、本遺跡の北方にある相楽遺跡では、古墳時代中期及び奈良時代を中心とする集落跡が確認されており、遺跡推定範囲内には、式内社である相楽神社が鎮座している。

八ヶ坪遺跡は、今まで2回の調査が行われている。第1次調査は、遺跡範囲の最北部分に当たり、奈良時代の掘立柱建物跡が確認されている。建物には庇が付き、いわゆる、歌姫街道に隣接していることから、一般的な建物以外の性格を有しているとも考えられている。第2次調査地は、東端部分に当たり、中世の素掘り溝を検出している。溝の位置関係から、条里水田遺構と考えられ、半折型であることも判明した。今回の調査地は、遺跡範囲のほぼ中央に当たることから、これらに関連する遺構・遺物の検出が予想された。

調査概要 調査は、一般地方道木津平城線(歌姫街道)の両側に、幅約3m・長さ約90mのトレンチを設定し行った。東側を第1トレンチ、西側を第2・3トレンチと呼称した。第1トレンチの基本的堆積状況は、耕作土・床土・灰褐色砂層・暗青灰色粘土層であり、道路西側に比べ0.5～1m程度低いことから、遺構面は削平を受け消失していると考えられる。



調査地位置図 (1/25,000)

なお、トレンチ南半は、床土下に暗青灰色粘土層が厚く堆積しており、住居を造営するには適していなかったと考えてよい状況にある。この部分には、「地獄田」「川久保」のような湿地を表わす字名が残っており、考古学的調査成果と字名が大略において一致した良好な資料を得たと言える。第2トレンチでは、中世の素掘り溝と奈良時代の遺物包含層を確認した。この素掘り溝は、現行の水田畦畔とほぼ一致しており、溝内から若干の遺物が出土している。第2次調査で確認した中世溝と主軸線の方向や形状が酷似することから、中世における条里水田遺構の広がりを考える上で重要な発見と言える。第3トレンチでは、奈良時代の柱穴・土壇、中世の素掘り溝を検出したが、調査面積が狭いため、掘立柱建物跡として正確に復元し得なかった。奈良時代の土壇からは、土師器・須恵器が出土しており、その出土状況から、一括して投棄されたと考えられる。第3トレンチは、第1次調査地の南側に隣接しており、奈良時代の柱穴は、第1次調査時検出の建物跡の一部と考えられる。しかし、第1次調査の建物跡の主軸線が真北方向であるのに対し、今回、検出した建物跡の主軸線は、真北より20°前後振れることから、奈良時代の建物にあっても新旧関係がある可能性も指摘できる。中世素掘り溝は、第2トレンチ及び第2次調査で確認している溝と同一の主軸線であることから、中世段階の条里水田遺構として捉えることができる。溝内最下層から白磁碗の破片が出土している。

まとめ 今回の調査で得られた考古学的資料は、地味ではあるが、八ヶ坪遺跡の性格を考える上で一つの根拠を得たと言える。以下、項目ごとに整理しておきたい。

①奈良時代の柱穴は、掘立柱建物跡の一部として考えることができるが、その立地は、歌姫街道に隣接しており、街道との関連も考えねばならない。第1次調査で検出した建物跡が底を持つものであること、加えて式内社である相楽神社に近接することなど、建物跡の性格を考える場合、周辺の遺跡を含めた総合的な解釈が必要である。

②中世段階の素掘り溝は、第2次調査で検出した溝と同時期であり、中世条里水田遺構と考えられる。この地域の条里が半折型を基本としていることは、歴史地理学の分野からすでに指摘されていることではあるが、今後、水田遺構の広がり注目する必要がある。

③現行の歌姫街道は、調査範囲については、水田の畦畔に対して45°の角度で走っている。条里が中世において真北方向と一致することを考えれば、現道は、極めて新しい時期に属する。街道に関する遺構は検出できなかったが、第2トレンチの調査成果や「地獄田」等の字名から、古道としての歌姫街道の成立時期を再検討する必要がある。（小池 寛）

第1次調査 『木津町史』史料篇Ⅰ 木津町史編さん委員会

第2次調査 松井忠春「八ヶ坪遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

資 料 紹 介

熊野郡久美浜町下山古墳出土の須恵器

荒 川 史

1. はじめに

今回紹介する須恵器は、熊野郡久美浜町大字須田小字下山に所在する下山古墳から出土した遺物である。この須恵器は、大正14年に水路を変更するため、古墳を削平した際に出土したもので、現在土地所有者の柴田家に保管されている。今回柴田 進氏の御好意により資料を紹介する機会をえた。

2. 古墳と遺物の概要

下山古墳は、伯耆谷南側の谷口丘陵先端に位置する。伯耆谷は、双龍環頭大刀が出土した湯舟坂2号墳をはじめとして、5世紀から6世紀にかけての古墳が、100基以上分布する地域である。古墳は、現在は大きく削平され、原形を留めていないが、組合式石棺らしい主体部があり、須恵器(杯身・杯蓋・壺・甗)・馬具・鉄刀等が出土したと伝えられている。

このうち、杯身と杯蓋は川上小学校に保管されており、杉原和雄氏によってすでに紹介されている。

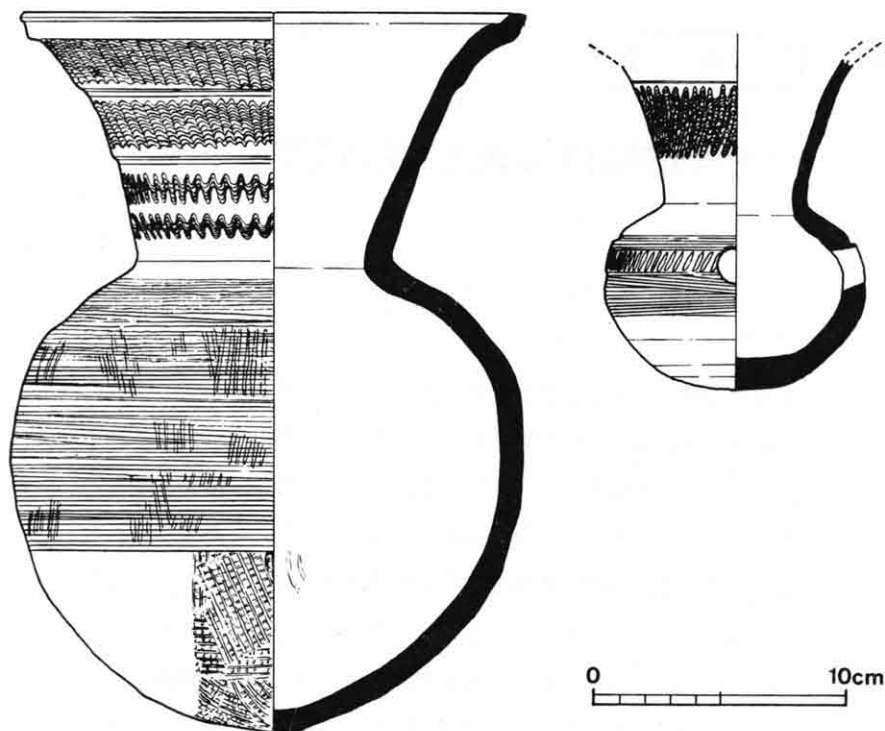
柴田家に保管されている須恵器は壺と甗の2点である。

壺は、大きく外上方に広がる口縁を持ち、口縁端部はやや受け口状を呈する。口縁は沈線によって3段に区画され、それぞれに波状文を施す。最下段のみが2条の波状文を持つ。体部は格子叩きを施し、その後底部付近を除きカキ目を施す。体部内面は同心円文の当て具痕をナデ消している。

甗は、口縁端部に欠損している。頸部からやや外反ぎみに広がる口縁を持ち、口頸



第1図 下山古墳位置図



第2図 遺物実測図

部には波状文を施す。胴部は球形を呈し、中位に2条の沈線によって区画し、刺突文を充填する文様帯を持つ。文様帯下部にはカキ目、胴部下半にはヘラケズリを施す。

これらの土器は、陶邑編年のTK10型式と考えられ、先に紹介されている杯と矛盾しない。

3. おわりに

須田古墳群は、丹後地域でも有数の群集墳であるが、これまで発掘調査が行われたのは湯舟坂2号墳のみであり、その様相はあまり明らかでない。しかし、今回の資料のように地元に埋もれている資料もあり、これらを紹介していくことによって須田古墳群の実態が徐々にでも明らかになれば幸いである。

末筆ながら、資料紹介の機会を与えて下さった柴田 進氏・川原哲子氏に謝意を表する。

(あらかわ・ふみと=当センター調査第2課調査第1係調査員)

<参考文献>

- 『湯舟坂2号墳』(京都府久美浜町文化財調査報告第7集 久美浜町教育委員会) 1983
杉原和雄「丹後地方の横穴式石室採用以前の須恵器資料」(『水と土の考古学』小江慶雄先生還暦記念論集刊行会) 1974

資 料 紹 介

志高遺跡出土の轟式系統の土器について

三 好 博 喜

1. はじめに

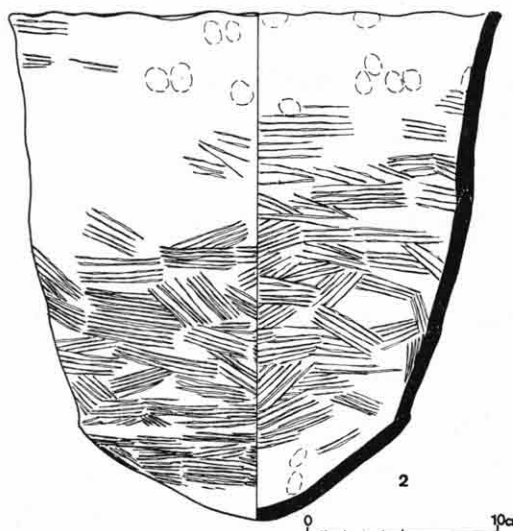
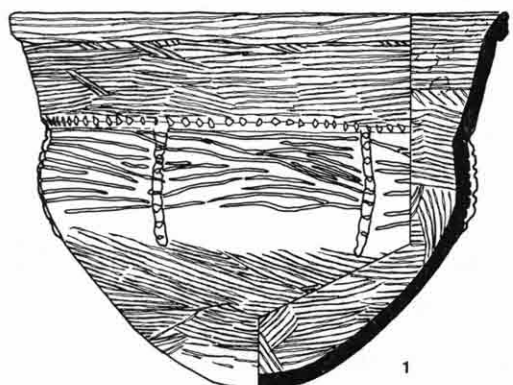
近年来日本海側各地で低湿地における縄文遺跡の調査・報告が相次いで行われている。このような状況は、西日本における早期末から前期初頭にかけての資料の増加を促し、当該期の土器研究に新しい展開をもたらした。特に山陰での資料の増加は著しい。これに対して近畿北部をみると、鳥浜貝塚を除いて際立った調査・報告は多くない。

以下に紹介する資料は、京都府舞鶴市志高遺跡最下層出土の土器で、当該期の資料と考えられるものである。最下層出土の土器については、先に紹介した一群の土器がある^(注1)。今回の資料は、前回の資料とは出土地点が多少異なるものの、層序の観察やレベル高からみて、同一層位の可能性はきわめて高い。今回の資料は、最下層の土器の様相を考える上では重要な意味を持つと思われるため、ここに資料の紹介を行っておきたい。なお、前回および今回の資料については、さらに観察・検討を加え最終報告を行う予定である。

2. 出土遺物

1は、口径約25cm・器高約20cmを測る鉢形土器である。底部は尖底気味の丸底で、胴部が大きく膨む。頸部には、浅い段をつくり、外反ぎみに口縁部を立ち上げている。口縁は平口縁である。口縁端部外面には粘土紐を貼り付けて口縁を肥厚させ、幅1.5cm程度の段状貼付隆帯を形成している。調整は、表裏面ともに条痕調整を基調としており、口縁部の貼付隆帯にも条痕が施される。胴部上半には、頸部から6条の隆起帯を垂下させている。これらの隆起帯は、長さ6cm・幅0.5cm程度のもので、隆起帯には刺突を加えている。同様の刺突は、頸部に形成された浅い段の肩部にも巡らされている。また、各隆起帯間は、沈線で充填している。口縁部内側には指頭圧痕もみられる。色調は、外面が茶褐色もしくは暗茶褐色で、内面が黒褐色を呈している。内外面ともに炭化物の付着が認められる。

この土器の施文の特徴は、条痕文を地文とした口縁部貼付隆帯と刻目隆起帯である。宮本一夫氏^(注2)の土器細分によると、前者はA2a類にあたるものと考えられ、山陰を中心とした分布がみられる。後者はB2a類に該当するものと思われ、轟B式第2類として九州に広く分布する施文手法である。本資料は、いわばA2a類とB2a類との折衷型といえる土器である。



出土遺物

2は、推定口径23cm・器高26.5cmを測る深鉢形土器である。底部は、尖底気味の丸底で、胴部は下半部で大きく屈曲して立ち上がる。口縁は平縁である。口縁端面には二枚貝によると思われる圧痕が巡らされている。調整は、内外面ともに条痕調整を基本としている。口縁部付近の内外面には、指頭圧痕もみられる。色調は、外面が茶褐色ないしは暗茶褐色で、内面が黒褐色を呈している。内面には炭化物の付着も認められる。

3. おわりに

志高遺跡最下層出土の土器は、3字状刺突文の羽島下層Ⅱ式を包含する層位から、0.5m程度の無遺物層(粗い砂層)を挟んで、下に堆積する層位から出土している。この2つの層位から出土した土器の様相には、大きな差異が認められる。これらのことから、今回紹介した縄文系統の土器が羽島下層Ⅱ式に先行する型式であることが知られる。また、この土器の出土により、前回紹介した土器群のなかにも当該期のものが含まれているものと考えられる。前回紹介資料のうち、口縁部に段帯をもつ土器(20や23・27)については、口縁部に貼付隆帯の肥厚が顕著でなく段状になるタイプかもしれない。

最下層の土器群については、他の要素をも含め、さらに観察・検討を進めていきたい。

(みよし・ひろき=当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 三好博喜「志高遺跡出土の縄文時代草創期の土器をめぐって」(『京都府埋蔵文化財情報』第25号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注2 宮本一夫「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和59年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1987

府下遺跡紹介

39. 乙訓寺遺跡

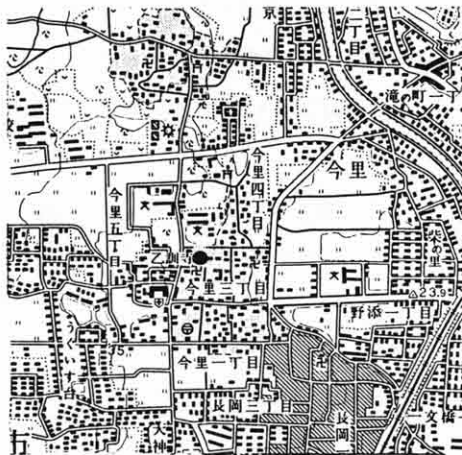
乙訓寺は、長岡京市今里にあって、現在も同名の寺院が存在している。この乙訓寺の境内からは、古瓦が多量に出土しており、古くから遺物の散布地として知られていた。

乙訓寺の創建については、梅原末治・田中重久・高橋美久二らの古瓦の文様に関する研究から推定したものがあって、特に高橋によれば、西暦670年頃になるという。しかし、誰の開基であるのか、また、どのような性格の寺院であるのか、といった点についてはほとんどわかっていないのが現状である。近世の『和漢三才図絵』には、推古天皇の創建とあるが、後述するように、発掘調査の結果から、7世紀中葉以前には遡らない寺院であるので、この伝承は、信用することができないのである。

乙訓寺が確実な史料上に出てくるのは、長岡京遷都頃が最古のものである。『日本紀略』延暦四年九月庚申(二十八日)条に、

是日、皇太子自内裏歸於東宮，即日戌時出置乙訓寺，是後，太子不自飲食，積重餘日，遣宮内卿石川恒守等，駕船移送淡路，比至高瀬橋頭已絶，

とあり、藤原種継が暗殺された事件で、早良親王が廃されて乙訓寺に十日余りも幽閉されたことを述べている。この記事は、『日本紀略』独自のもので、同日に起こったはずの、皇太子を廃することを記した宣命なども載せられている。『日本紀略』よりも詳しい記載であるべき『続日本紀』には、どういいうわけか早良親王の廃太子の経過については記事が



遺跡所在地 (1/25,000)

欠落している。わずかに、翌十月八日の山陵に廃太子を告げる旨のことが書かれているに過ぎない。理由はよくわからないが、『続日本紀』が完成した延暦15・6年頃は、事件の関係者も多く生きていたために、『続日本紀』から意識的に削除されたのかもしれない。

それはともかくとして、乙訓寺は、このように早良親王の幽閉されたところとして出てくるのである。その後、どのようになったか、史料がなく、不明な点が多い。そ

の中で、『弘法大師年譜』に引用された太政官符が注目される。それには、

太政官符治部省

僧空海

右檢案内、太政官去十月廿七日下午彼省符偁、件僧住山城國高雄山寺、而其処不便、省承知令住同國乙訓寺者、今被右大臣宣偁、令別當彼寺永預修造事者、省宜承知、依宣行之、寮宜承知、依件施行、

弘仁二年十一月九日

とあって、空海が乙訓寺の別当となって、その修造に当たったことが知られる。『古事類苑』では、このことと現在の乙訓寺が真言宗であることから、この時点で真言宗になったと解釈している。しかし、この太政官符からは、空海を乙訓寺の別当に任じて寺の修造に当たらせたとのこと以外は全くわからないといってよい。

このように、文献史料の上では、早良親王の幽閉場所という点と、空海がこの寺の別当になったこと以外は、ほとんどわからない。ただ、先にあげた『和漢三才図絵』や、また『山城名勝志』には、乙訓寺の別名として「法皇寺」という寺号を伝えている。これは、「寛平法皇爲行宮」した結果、「法皇寺」と改めたという伝承である。寛平法皇は、宇多上皇のことであるが、宇多上皇とこの乙訓寺が関係あるように伝承されている点はおもしろい。実際、「法皇寺」の称号は、『革嶋家文書』に収められた「堀内爲頼田地名主職買券」（寛正3年=1462）にも「在山城國乙訓郡今里庄八幡領之内也」として、その四至が書かれている。その四至は、「限東道、限南法皇寺田、限西實覺寺田」とある。これは、法皇寺が今里荘内にあって、場所的にも現在の乙訓寺と近いようである。また、今里荘のとなりの開田荘は、仁和寺領であり、現乙訓寺近辺の田地も開田荘に含まれているものもあった。これらのことから、乙訓寺と宇多上皇との関係を推定する意見もある。ただ、これも遡れても室町時代までであって、確実に宇多上皇との関係を示すものではない。むしろ、開田荘が仁和寺領となって以後に、このような伝承がつくられた可能性もあるので、現時点では乙訓寺と宇多上皇との関係は不明としておくほかはなからう。

乙訓寺の発掘調査は、1966年に実施され、講堂と推定される礎石建物や、その他の掘立柱建物跡・瓦窯跡・火葬墓跡などが見つかっている。特に、講堂跡と推定される建物は、すでに礎石は失われていたが、その下に敷いた根石が残っていた。そして、その根石の間から出土した瓦から、ほぼ奈良時代の終わりごろに建てられたことがわかった。乙訓寺の建物は、掘立柱建物が僧坊跡と推定されたほかは、ほとんどわからなかった。しかし、現在の寺院の寺域や、周辺の地割りからみて、旧乙訓郡条里にそったもので、東西1.5町以上・南北2町以上の広大な寺域が想定されている。遺構的には、奈良時代に遡るものはあ

っても、創建当初を示す遺構は見つからなかった。ただ、出土した瓦の文様の編年からすれば、ほぼ白鳳期(7世紀中葉から後半)に創建されたものと考えられる。

現在の乙訓寺は、本堂・毘沙門堂・鐘楼などの建物からなっている。元禄年間に桂昌院によって再興されたものである。その後、享保年間に修理がなされ、その時の資料の一つとして「今里村乙訓寺指図」が残されている。これによれば、現存する南門と東門は、先の1966年の発掘調査でみつかった推定講堂跡と同じ条里の一町区画内にあることがわかり、奈良時代末から平安時代初頭の伽藍配置を復原する際の資料として考えられている。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 梅原末次「乙訓寺礎石及古瓦」『京都府史蹟勝地調査會報告』第1冊 京都府 1919年
田中重久「山城国の郡名寺院」『史迹と美術』11-6 1940年
高橋美久二「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」『史想』第15号 京都教育大学考古学研究会
1970年
『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』 京都府教育委員会 1967年
『弘法大師年譜』巻五
「資料紹介 革嶋家文書(一)」『資料館紀要』第5号 京都府立総合資料館 1977年
『長岡京市文化財調査報告書』第12冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1984年

長岡京跡調査だより

この12月から2月にかけての3か月間に行われた長岡京跡の発掘調査は、下記表のとおり、長岡宮跡4件・長岡京跡右京域15件・同左京域6件の計25件ありました。これらの調査では、長岡京の道路側溝や長岡京期の建物跡、弥生時代や古墳時代の住居跡、奈良時代

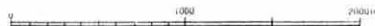
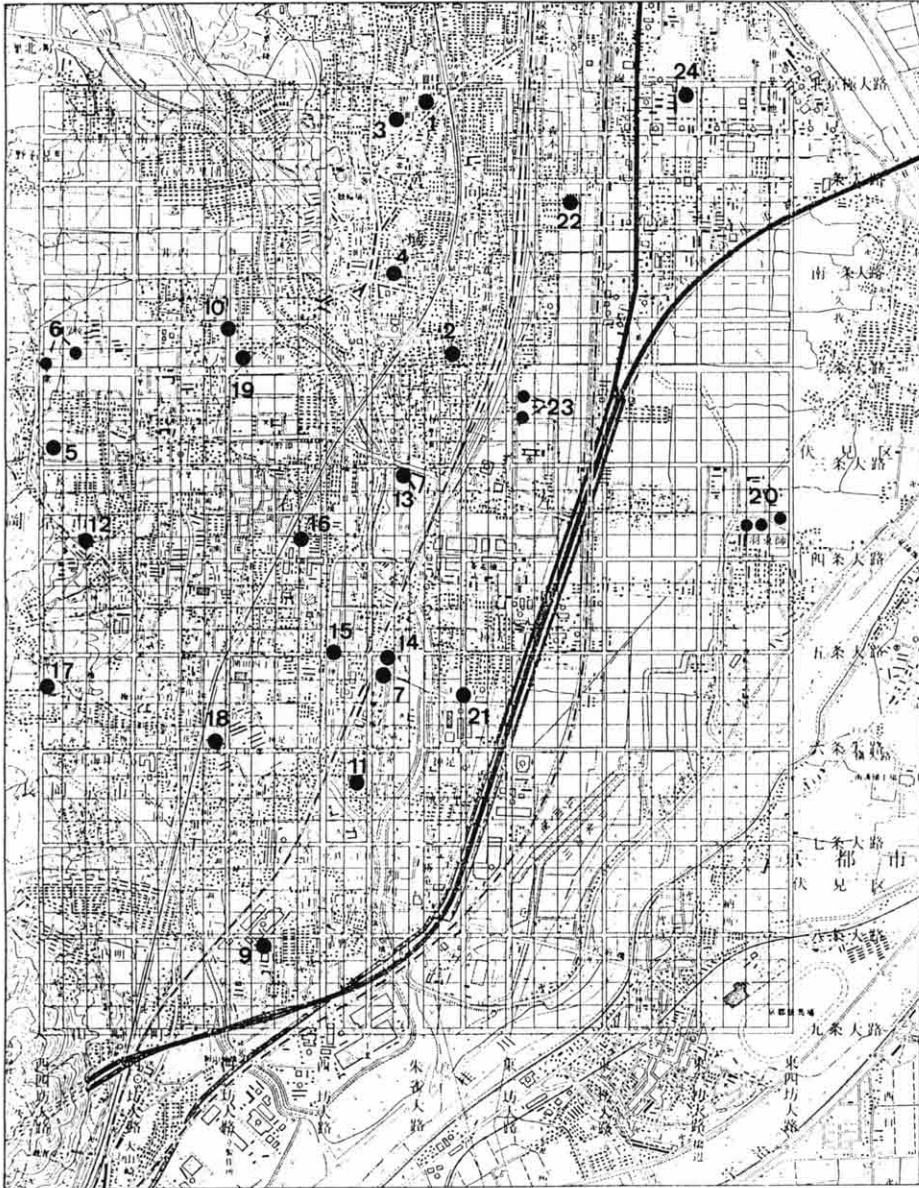
調査地一覧表

(昭和63年2月末現在)

	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第200次	7AN6J	向日市寺戸町初田	向日市教委	62.10.14~12.15
2	宮内第203次	7AN10M	向日市上植野町浄徳丸山	向日市教委	62.10.1~12.14
3	宮内第204次	7AN11J	向日市寺戸町殿長	向日市教委	63.2.24~
4	宮内第205次	7AN14Q	向日市鶏冠井町大極殿73-1	(財)京都府埋セ	63.2.12~
5	右京第276次	7ANJJK-3	長岡京市長法寺北畠20	長岡京市教委	62.9.14~63.2
6	右京第277次	7ANHKB-3	長岡京市粟生川久保	(財)京都府埋	62.9.9~63.1.22
7	右京第279次	7AN ^{MWY-3} _{MTT-4}	長岡京市東神足1丁目	(財)長岡京市埋	62.10.27~
8	右京第283次	7ANSTE-7	大山崎町円明寺鳥居前14-20	大山崎町教委	63.1.19~1.31
9	右京第284次	7ANRUI-2	長岡京市調子3丁目1-1	(財)長岡京市埋	62.11.11~12.26
10	右京第285次	7ANIFC	長岡京市今里更ノ町	(財)京都府埋	62.11.12~
11	右京第287次	7ANQND-2	長岡京市勝竜寺28-2	(財)長岡京市埋	62.11.20~12.26
12	右京第288次	7ANJKD	長岡京市長法寺河原谷	(財)長岡京市埋	62.12.1~63.1.9
13	右京第289次	7ANFDE-2	向日市上植野町堂ノ前	向日市教委	62.12.14 ~63.1.16
14	右京第290次	7ANMWY-5	長岡京市東神足1丁目10-1	(財)長岡京市埋	63.1.6~1.23
15	右京第291次	7ANKSM-6	長岡京市開田2丁目10-53	(財)長岡京市埋	63.1.11~1.26
16	右京第292次	7ANKMN	長岡京市開田1丁目208-1	(財)長岡京市埋	63.1.20~2.15
17	右京第293次	7ANPOT-2	長岡京市奥海印寺岡本	(財)長岡京市埋	63.2.15~2.27
18	右京第294次	7ANNKN-3	長岡京市友岡1丁目745-3	(財)長岡京市埋	63.2.13~2.20
19	右京第295次	7ANIAC-2	長岡京市今里畦町16-6	(財)長岡京市埋	63.2.22~
20	左京第174次	7AN ^{XOR} _{XUK}	京都市伏見区羽束師志水町	(財)京都市埋	62.7.31~
21	左京第184次	7ANMST-4	長岡京市神足芝本6	(財)長岡京市埋	62.11.26~12.26
22	左京第185次	7ANDKG-5	向日市森本町小柳地内	向日市教委	63.1.11~2.4
23	左京第186次	7ANFSB	向日市上植野町三ノ坪・五ノ坪	向日市教委	63.1.19~2.4
24	左京第187次	7ANVOC	京都市南区久世大藪町	(財)京都市埋	63.1.22~

長岡京条坊復原図

平城京型復原による



数字は本文（ ）内と対応

の建物跡等が検出されたほか、近世の勝龍寺城に関係した遺構が確認される等の成果があがっています。また、これら長岡京の調査のほか、向日市の中海道遺跡や大山崎町の山城国府跡の調査も行われています。このうち山城国府跡の調査では、平安時代前期の井戸や木桶、文字瓦や銭貨・緑釉陶器等、国府に関係した遺構・遺物が検出されました。

それでは以下に、12月23日・1月28日・2月24日の長岡京連絡協議会で報告された調査のうち、主要なものについて簡単に紹介いたします。

宮内第200次(1)

向日市教育委員会

この調査地は長岡宮の北辺官衙の推定地に当たり、朝堂院中軸から東へ約18m離れた長岡京期の南北溝や、この溝に合流する東西溝等が検出され、「青郷中男作物海藻六斤」や「陰陽寮解 申□□」と記された木簡等が出土していたが、調査トレンチを西側に拡張したところ、長岡京期の南北溝が2条検出された。この溝は、東側の溝が幅約3m余り、西側のものが約1.6m前後を測るもので、両溝間は1m半程ある。ここからは、築地の寄柱の跡と思われる2列の柱穴列が検出されており、ここに築地があったものと想定されている。また、以前に検出されていた東側の南北溝のうち、側板や杭(角杭)で護岸されているところの西で、南北1間・東西2間の規模の礎石建物跡が検出された。柱間距離は、南北方向が約3.3m、東西方向が約1.2mを測り、門ではないかと推定されている。この建物跡の検出された地点は、北京極大路と一条第1小路計画心とのほぼ中央にあたり、南北溝の側板等で護岸されている部分には、溝に打ち込まれた杭を橋脚として使った橋が、かかっていたものと推定されている。

遺物には、前記の木簡のほか、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・人形ひとがた・下駄・木製紡錘車・曲物底板・ミニチュアカマド・弥生土器等が出土している。

宮内第203次(2)

向日市教育委員会

調査地は、長岡宮の内裏南方官衙の推定地に当たり、長岡京期の東西溝や掘立柱建物跡、柵列跡、土壇等が検出された。掘立柱建物跡は3棟検出されており、うち2棟は総柱の建物跡である。

1棟は、南北2間・東西3間、もう1棟は、南北1間以上・東西2間の規模を持つ。遺物としては、長岡京期の土師器・須恵器・瓦等が出土している。

右京第276次(5)

長岡京市教育委員会

長法寺七ツ塚古墳群の3・4号墳の調査である。最終的に、3号墳からは4基の、4号墳からは3基の、木棺直葬の主体部が検出された。各主体部からは、金環・銀環・切子玉・管玉・瓊玉・琥珀玉・平玉・丸玉・ガラス小玉・土玉・滑石製紡錘車・鉄刀・鉄鎌・鉄ノミ・刀子・鞍金具・鉄鋌・須恵器等、多くの副葬品が出土した。また、3号墳の主体部の1つには、成人2体、子供1体の人骨が埋葬されていたことが確認されている。

右京第277次(6)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は、長岡京の右京二条四坊五町及び十三町の推定地に当るが、弥生時代後期の竪穴式住居跡、平安時代以降の柱穴列、中世の溝、古墳時代や長岡・平安時代の遺物が含まれた自然流路の一部等、他の時代の遺物が主として検出されている。

右京第279次(7)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

江戸時代の掘立柱建物跡・柵列跡・溝・土塚、長岡京期の掘立柱建物跡・柵列跡・溝・土塚、古墳時代の掘立柱建物跡・竪穴式住居跡・土塚・溝、弥生時代の竪穴式住居跡・土塚・壺棺墓・土塚墓・溝等、多くの遺構が検出されている。

江戸時代の遺構は、当地が寛永10(1633)年から慶安2(1649)年までこの地域一帯の領主であった永井直清が築いた勝龍寺城跡の本丸推定地に当っており、これと関係した遺構群と推定されている。長岡京期の遺構は、掘立柱建物跡が3棟、東西方向にのびる柵列跡が2条・溝・土塚等が検出されているが、掘立柱建物跡のうち1棟は、西一坊第1小路推定地から検出されている。検出された掘立柱建物跡は、いずれも東西棟で、梁間2間・桁行3間ないし3間以上の規模のものである。また、この時期の土塚には、多量の製塩土器片が投棄されていた。古墳時代の遺構は、6世紀後半を中心とする時期のもので、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡は、棟方向等から、少なくとも2時期に分かれるものと推定されてい

る。弥生時代の遺構は、弥生時代中期のもので、竪穴式住居跡が密集して検出されている。平面形は、隅丸方形の1基を除き、他はすべて円形を呈している。また、焼失家屋も検出されており、このほか土塚墓や中期後半の土器を使った壺棺墓等もある。

遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器・陶磁器・瓦・石鏃・石剣・石錐・石斧・石庖丁・砥石・鉄製刀子・鉄製鎌・不明鉄製品等が出土している。特に、銅剣形磨製石剣が住居跡内から出土しているほか、磨製石器の未製品が多く出土している。

右京第285次(10)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は、長岡京の西二坊大路や二条条間大路の推定地に当たり、西二坊大路東側溝や二条条間大路南側溝、長岡京期ないしはその前後の時期と思われる掘立柱建物跡等を検出している。

掘立柱建物跡は、現在2棟検出されているが、うち1棟は、桁行5間・梁間2間の規模の東西棟で、西二坊大路の路面上にある。二条条間大路は、元来自然流路であったところを埋めたてて造られており、南側溝は、杭や板材で護岸されている。この自然流路からは、多量の遺物が出土しており、土師器・須恵器等のほか、人形・木簡・墨書土器等がある。木簡は、現時点では「観世」の2字が読み取れる。

右京第287次(11)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、勝龍寺城本丸跡のすぐ南側に位置し、室町時代の井戸や多数の柱穴が検出され、14～15世紀頃の土器や陶磁器類が出土している。このほか、弥生時代後期の遺物等も検出されている。

右京第288次(12)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査地は、長岡京の右京四条四坊十二町の推定地に当たるとともに、長法寺遺跡の一面に位置する。この調査では、弥生時代の径10m近くを測る、平面六角形を呈する竪穴式住居跡や、幅3m近くの大溝等が検出されている。

右京第289次(13)

向日市教育委員会

この調査では、中世の凹地状の遺構や自然流路、長岡京期の柱間が約1.9mを測る東西方向の柵列跡1条、古墳時代の1辺約4mの隅丸長方形の竪穴式住居跡1基、弥生時代中期～後期の竪穴

- 式住居跡3基・土坑等が検出されている。
- 遺物は、中期前半～後期までの弥生土器、古墳時代前期の土師器、長岡京期の土師器・須恵器、中世の瓦器・白磁等が出土した。
- 右京第290次(14) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 調査地は、長岡京の西一坊第1小路等の推定地に当るが、この調査で、近世の勝龍寺城(永井直清造営)の本丸北側を画する深さ約2mの濠や柱穴列、弥生時代中期の方形周溝墓等が検出された。
- 右京第292次(16) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 調査地は、長岡京の四条第2小路等の推定地に当たるが、弥生時代中期の方形周溝墓等が検出されている。検出された方形周溝墓は3基あり、1基は短辺8m・長辺10m程の規模のもので、中央部には、主体部の痕跡が残されている。このほか、壺棺も1基検出されている。
- 左京第184次(21) 長岡京市教育委員会
- 調査地は、東一坊坊間大路等の推定地に当たる。この調査では、中世の溝や長岡京期の溝等が検出された。
- 左京第185次(22) 向日市教育委員会
- 調査地は、長岡京の左京南一条二坊九・十町及び南一条第1小路の推定地に当たる。調査の結果、南一条第1小路の南側溝や長岡京期の柱穴や弥生時代の流路等が検出された。
- 左京第186次(23) 向日市教育委員会
- 長岡京の三条第1小路と三条条間小路の推定地を調査し、三条第1小路南北両側溝及び三条条間小路南北両側溝と左京三条二坊三町の宅地内溝等が検出された。三条第1小路は、溝心で約9m、三条条間小路(大路)は同じく約25mを測る。
- 左京第187次(24) (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 調査地は、長岡京の左京一条三坊六町の推定地に当たるとともに、中久世遺跡の一面に位置する。この調査では、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての竪穴式住居跡が15基検出された。平面形が方形や円形を呈したもののほか、多角形のもので1基検出されている。
- (山口 博)

センターの動向 (62. 12～63. 2)

1. できごと
12. 3 第20回役員会・理事会一於・京都
堀川会館一福山敏男理事長, 樋口隆康副
理事長, 川上 貢・上田正昭・藤井 学・
原口正三・上田 将・堤圭三郎の各理事,
荒木昭太郎常務理事出席
12. 9 普甲・稲荷古墳群(弥栄町)発掘調
査終了(6. 1～)
12. 10 泉源寺遺跡(舞鶴市)発掘調査関係
者説明会実施
12. 11 八ヶ坪遺跡(木津町)発掘調査関係
者説明会実施
12. 12 第44回研修会開催(別掲)
12. 14 小西町田遺跡(綾部市)発掘調査現
地説明会実施
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘
技術者専門研修「埋蔵文化財情報課程」
参加(鍋田調査員, ～12. 25)
蒲生遺跡(丹波町)発掘調査開始
12. 18 泉源寺遺跡発掘調査終了(10. 13～)
12. 21 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
「日本列島発掘展」代表者会議(於・新大
阪シティプラザ)出席(杉原調査第2課長)
12. 23 長岡京連絡協議会開催
小西町田遺跡発掘調査終了(5. 8～)
八ヶ坪遺跡発掘調査終了(11. 9～)
12. 28 仕事納め
63. 1. 4 仕事始め
1. 10 三宅4号墳(綾部市)発掘調査開始
1. 11 平安京跡(京都市一第2行政棟)発
掘調査開始
1. 19 西山遺跡(木津町)発掘調査開始
1. 21 シゲツ窯跡(舞鶴市)発掘調査終了
(9. 21～)
1. 22 長岡京跡右京第277次(長岡京市)
発掘調査終了(9. 9～)
1. 23 瀬後谷遺跡(木津町)発掘調査終了
(7. 13～)
1. 25 新ヶ尾東古墳群(弥栄町)発掘調査
終了(10. 6～)
1. 27 長岡京連絡協議会開催
1. 28 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
「日本列島発掘展」近畿ブロック会議(大
阪市)出席(杉原調査第2課長・田代調査
員)
新庄遺跡(久美浜町)発掘調査終了(11.
10～)
1. 30 三宅遺跡(綾部市)発掘調査現地説
明会実施
2. 4 蒲生遺跡発掘調査関係者説明会実
施, 発掘調査終了
2. 6 第45回研修会開催(別掲)
2. 10 桑飼上遺跡(舞鶴市)発掘調査関係
者説明会実施, 発掘調査終了(7. 6～)
2. 12 長岡宮跡第205次(向日市)発掘調
査開始
2. 13 千代川遺跡(亀岡市)発掘調査現地
説明会実施
2. 16 京都府監査委員監査
小貝遺跡(綾部市)発掘調査終了(9. 2～)
2. 19 西山遺跡発掘調査終了
菩提遺跡(木津町)発掘調査開始
2. 20 青野遺跡(綾部市)発掘調査現地説
明会実施

長岡京跡右京第285次(長岡京市)発掘調査現地説明会実施

- 2. 24 長岡京連絡協議会開催
- 2. 25 青野遺跡(綾部市)発掘調査終了(10.19～)
瓦谷遺跡(木津町)発掘調査終了(10.11～)
- 2. 26・27 「東洋学研究支援データベースの研究」第3回研究集会(於・京都大学人文科学研究所)出席(土橋調査員)

2. 普及啓発事業

- 12. 12 第44回研修会開催一於・京都社会福祉会館：昭和61・62年度の発掘調査の成果から一鍋田 勇「綾部市平山城館跡の発掘調査」、樋口隆久「観音芝廃寺第1・第2次発掘調査概要」、永田信一「平安宮復元の現状」
- 63. 2. 6 第45回研修会開催一於・向日市文化資料館：近年の都城の調査成果から一久保哲正「恭仁京跡の調査」、山中 章「長岡京跡の調査～古代都城にみる条坊と宅地割りの変遷」、金 誠龜「雁鴨池とその出土遺物」

受贈図書一覧 (62. 12 ~ 63. 2)

苦小牧市埋蔵文化財調査センター	弁天貝塚～幕末期以降に於けるアイヌ貝塚の発掘調査報告書～、苦小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅱ
(財)市原市文化財センター	財団法人市原市文化財センター調査報告書 第13・16～19・22集、毛尻遺跡調査報告書
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター年報1 昭和60年度
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第22・29集
(財)浜松市文化協会	四ツ池古墳群、龍門池遺跡
三重県斎宮跡調査事務所	三重県斎宮跡調査事務所年報 1986 史跡斎宮跡一発掘調査概報一
(財)滋賀県文化財保護協会	特別史跡彦根城一県立彦根高等学校資料室建設に伴う発掘調査報告書一、高岡塚古墳発掘調査報告書、県宮かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ一2、ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ-5、唐橋遺跡一瀬田川浚渫関連文化財範囲確認調査
(財)東大阪市文化財協会	鬼虎川の木質遺物一第7次発掘調査報告書 第4冊一、鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	年報Ⅱ 昭和58年度～昭和60年度、遺跡がかたるひろしま、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第54～65集、賀茂学園都市開発整備事業地(西高屋地区)内遺跡群Ⅱ
山形県教育庁文化課	山形県埋蔵文化財調査報告書 第107～116・118集
小平市教育委員会	鈴木遺跡範囲確認調査報告書一昭和62年度一
新潟県教育委員会	新潟県埋蔵文化財調査報告書 第47、新潟県中世城館跡等分布調査報告書
長野市教育委員会	長野市の埋蔵文化財 第20～23集
静岡市教育委員会	駿河西山遺跡 昭和59年度県営畑地帯総合土地改良事業(長田北西地区向敷地地内)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、駿河楠ヶ沢古墳群一楠ヶ沢2・3・7号墳発掘調査報告書、昭和60年度県営畑地帯総合土地改良事業(西奈地区)埋蔵文化財発掘調査報告書 瀬名古墳群瀬名3号墳、有東梶子遺跡
掛川市教育委員会	高田上ノ段遺跡発掘調査報告書、吉岡原遺跡発掘調査概報、瀬戸山Ⅰ-a 遺跡発掘調査概報、瀬戸山Ⅰ-b 遺跡発掘調査報告書
山東町教育委員会	高岡塚古墳発掘調査報告書
志賀町教育委員会	志賀町埋蔵文化財調査報告書 第1～2集
羽曳野市教育委員会	考古学にロマンを求めて 三木精一氏収集考古遺物展

御所市教育委員会	御所市文化財調査報告書 第5～6集
下関市教育委員会	綾羅木郷遺跡 若宮古墳周辺遺構確認調査
大野城市教育委員会	大野城市文化財調査報告書 第17～22集, 大野城市の文化財 第17～18集
朝地町教育委員会	朝地田村遺跡 大分県大野郡朝地田村所在史跡発掘調査報告書Ⅲ, 伊勢山中学校遺跡 第3次発掘調査概要報告書, 旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書(VI) (名古屋市中区大須一丁目・旧紫川遺跡第V次調査), 片山神社遺跡発掘調査概要報告書
滋賀県立近江風土記の丘資料館 堺市博物館	県外出土の信楽焼一流通の器種と範囲を探る— 館報 VI, 漁具の考古学—さかなをとる—
西宮市立郷土資料館	西宮の文化財 文化財資料 第30号
(財)辰馬考古資料館	山田博雄収集資料目録
洲本市立淡路文化史料館	淡路文化史料館収蔵史料目録 第1集 淡路三原町八木島田家文書
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第12号
栃木県立博物館	第22回企画展「おっとハイカラさん」 栃木県立博物館人文部門収蔵資料目録 第1集(考古1)那須の遺跡—渡辺龍瑞先生寄贈資料目録 第1集—
流山市立博物館	流山市立博物館調査研究報告書5 流山の石仏
君津市立久留里城址資料館	君津市立久留里城址資料館年報(昭和61年度)
(財)出光美術館	出光美術館館報 第59号
福井県立若狭歴史民俗資料館	年報1987, 鳥浜貝塚1985年度調査概報・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査6—, 鳥浜貝塚—1980～1985年度調査のまとめ—, 岩の鼻遺跡Ⅱ—1986年度調査概報, 御意見有用……アンケートのまとめ3～4
市立岡谷美術考古館	岡谷市政施行50周年記念 岡谷の今昔, 郷土の文化財15 梨久保遺跡
浜松市博物館	浜松市半田山遺跡(V)発掘調査報告書
名古屋市見晴台考古資料館	瑞穂遺跡 第4次調査の概要, 中区栄一丁目 第4次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書, 中区栄一丁目 第5次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書, 中区栄一丁目 第6次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書, 館企画特別展 南九州の墳墓—弥生・古墳時代—
鹿児島県歴史資料センター黎明館	
東北学院大学東北文化研究所	東北学院大学東北文化研究所紀要 第19号
山形大学山形史学会	山形大学史学論集 第8号
早稲田大学図書館	古代 第84号
立教大学学芸員課程研究室	Mouseion 33

東海大学史学会	東海史学 第21号
大手前女子大学	大手前女子大学論集 第21号
神戸女子大学史学会	神女大史学 第5号
別府大学付属博物館	アジア稲の起源と稲作圏の構造
琉球大学史学会	琉球史学 第15号
山武考古学研究所	毛尻遺跡調査報告書, 流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書
国立国会図書館	日本全国書誌週刊版 No. 1620・1622・1624
文京区真砂遺跡調査会	真砂遺跡
(株)名著出版	歴史手帖 第171~173号
(株)ジャパン通信社	月刊文化財発掘出土情報 第62号
(財)古代学協会	古代文化 第347~349号, 平安京跡研究調査報告 第17輯 平安京左京六条二坊六町
朝日新聞出版局大阪本部	アサヒグラフ 第3410号
中世土器研究会	中世土器研究合冊 (41~50号)
木簡学会	木簡研究 第9号
朝鮮学会	朝鮮学報 第125輯
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 第25号
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第19冊
精華町教育委員会	京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書一煤谷川窯址・畑ノ前遺跡
宇治田原町教育委員会	宇治田原町史資料篇 第5集
亀岡市教育委員会	ふるさと亀岡の文化財, 亀岡市文化財調査報告書 第15~18集
岩滝町教育委員会	京都府岩滝町文化財調査報告 第9~10集
京都府立山城郷土資料館	南山城山村民俗文化財調査報告書 山村のくらし I
舞鶴市郷土資料館	村里の仏たち
花園大学史学会	花園史学 第8号
立命館大学文学部	立命館大学文学部学芸員課程研究報告 第1冊一 鳴谷東1号墳第1次発掘調査概報一
元離宮二条城事務所	重要文化財二条城本丸御殿玄関修理工事報告書 第7集
岡本 正太郎	古代文化を考える 第16号, 古代史ファン 第41号
奥 義 次	玉城町文化財調査報告 II 上地山遺跡発掘調査報告書, 河田古墳群 C支群(東谷C遺跡)出土の先土器・縄文時代遺物, 飯高町郷土誌より第二編通史第一章原始, 大宮町の先史遺跡

小原 哲

関口 功一

中西 昇

平口 哲夫

韓国考古学報 2

古代史研究 第6号

国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分
布・試掘調査概報

富来町福浦港ヘラソ遺跡発掘調査報告Ⅰ—縄文前期編—

—編集後記—

年度末が近づき、何かと忙しくなりましたが、情報27号が完成しましたのでお届けします。

本号では、辻純一氏の投稿があり、平安京の条坊復原にコンピューターを用いるという、最新の技術を駆使した力作です。当センターの昭和62年度の調査関係では、特に大きな成果をあげた高山古墳群・栗ヶ丘横穴群・上人ヶ平遺跡について、詳しい概要を掲載しました。また、資料紹介として2本同時に掲載することもでき、本号もかなり充実したものになりました。よろしく御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第27号

昭和63年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中 西 印 刷 株 式 会 社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)